





(2)

75
6005
2

This volume is the property of His Majesty's
Government and is intended exclusively for the use
of Members of His Majesty's Consular Service in
Japan, in particular of those preparing for the
Interpreters' Examination.

Care should be taken not to mark or soil the
pages of this book.

British Embassy,

Tokio

February, 1911.

6 copies. This is no. 4.

2

第一



以書翰致啟上候陳ハ本月七日横濱
 居留地百ニ拾四番館ニ於テ無籍外
 國人ジャコブカールステインナル者貴國人ロベルト
 ビーチ氏ヲ銃殺致シ尤モ兇暴ヲ極メ
 候ニ付テハ神奈川県ニ於テモ其遺
 捕ニ困却シ警察官三名マテ負傷候
 趣ニ候處其際貴國軍艦アーチャー號乗
 員トーマス、ウヰルリヤム、ケリーフヒツク及
 ジジョン、クラウデー
 ノ兩名ハ本邦警察官ニカヲ協セ犯

英國大使官

人逮捕ニ盡力致シ遂ニ之カ為メ傷
瘕ヲ蒙リ候趣神奈川縣知事ヨリ逐
一報告有之候元來右軍艦員兩名ハ
素ト本件ニハ何等利害ノ關係ヲ有
セサルニ係ハラズ義心自カラ禁セ
ズ犯人ノ兇暴ヲ惡ムノ餘リ自己ノ
危険ヲ顧ミズ勇進シテ本邦警察官
ニ力ヲ添ヘ以テ其逮捕ヲ容易ナラ
シメ候ハ本大臣ノ尤モ満足スル所
ニ有之候將又其義氣勇敢ノ行為ノ

為メ不測ノ禍ヲ蒙リタルハ更ニ本
大臣ニ於テ深ク悲嘆スル所ニ有之
候就テハ貴下ヨリ其筋ヲ經テ右兩
名ハ本大臣ノ謝意可然御傳達相成
候様致度此段得貴意候敬具

明治二十五年七月廿二日

外務大臣子爵榎本武揚

大不列顛臨時代理公使

エム、カブリユ、イ、ト、ブ、ン、セ、レ、貴、下

第二

以書簡致啟上候陳ハ新潟並ニ夷港
 ニ建設有之候我政府ノ貸納屋近來
 追々敗類ニ陥リ實用ニ難適ニ付人
 民私有ノ倉庫ヲ以テ之ニ代用致度
 旨及御照會候昨年十二月廿一日附
 拙翰ニ對シ去月十日附第三号貴簡
 ヲ以テ御回答ノ趣致承知候然ルニ
 本件ハ閣下ヨリ一應貴政府ニ御稟
 議無之候テハ不相成トノ御手數ヲ

頃候ハ實ニ拙者意想ノ外ニ出候儀
ニシテ甚以御氣ノ毒ノ至ニ存候元
来本件ハ唯一地方ニ限り候儀ニテ
且格別重要ノ事柄ニモ無之ト拙者
ニ於テハ考察罷在殊ニ千八百六十
七年ノ取極書ニ連署相成候他ノ各
國公使即チ閣下御同僚ノ中多クハ
既ニ我考察ヲ承諾被致候テ閣下ノ
御見込トハ自カラ相異リ候様相見
候間其段爰ニ申述置候將亦前件ニ

關係ノ事項トシテ新潟地所一件ニ
付貴國人ハ未タ嘗テ全港ニ於テ地
所ヲ借有スルヲ得ル事ナシトノ御
説ハ拙者乍遺憾御同意難致候
千八百六十七年ノ取極書第七條ニ
依リ外國人ハ日本地主ト自談ニテ
地所ヲ借受クルト勝手タルハ固ヨ
リ不候言儀ニ候拙者聞知スル処ニ
テハ全港居留外國人ハ現ニ皆夫レ
内國ノ地主ヨリ借地致居候趣尤其

借地年限ニ至テハ貸借双方ノ間相
對ノ約定ニ依リ自カラ長短有之由
ニ候乍去其取結ビタル約定ノ年限
高賣上ニ取り利益ヲ享有スルニ充
分長カラサルヲ愁訴致候者有之ト
地所ヲ借受クルト不能ト云フヲ愁
訴スルトハ自カラ別件ニ可有之即
チ右愁訴ノ趣旨ハ地所ヲ借受クル
ト不能ノ意ニ無之トノ事實ハ現ニ
貴翰中ニ御論述ノ通外國人ニシテ

法方上下セシナラシ

如何様ノ地面ヲ得タルモ皆日本人
ノ名ヲ借リ云々ト有之ニ據テ明白
ニ有之即チ此儀ハ閣下ニ於テモ御
自認相成候事ニ有之候但夕之ヲ得
ルノ法方ニ至テ彼此不同アルハ自
カラ別種ノ論件ニ可有之ト存候
且又新潟港外國貿易ノ衰頽ハ外國
人ニ於テ家屋建築等ノ為地所ヲ借
有スルト不能ニ因ルトノ貴説ニ候
得共拙者ノ所見ニテハ第一該港貿

英國大吏官

易ノ振起セサル所以ハ該港ノ地形
タル船舶ノ繫泊ニ甚不便ナリ是其
大原因ト存候將亦全地方ハ中央市
場ニ遠キ僻陬ノ地ニシテ其近傍人
民多クハ農業ニ従事シ一体ニ奢侈
ヲ好マザルノ風俗ナレハ外國輸入
品ノ需用極メテ僅少ナルト是亦其
一因ト被存候乍併將來氣運一變シ
外國品ノ需用開クルニ至リ候ハ、
該地ノ貿易愈盛昌ニ赴キ此々々ル

難事随テ消滅ニ歸スルハ自然ノ勢
ニ可有之ト存候

事實前陳ノ通ニ候得ハ我政府カ條
約面ヲ履行セズ或ハ外國人ノ權理
ヲ褫奪ストノ閣下ノ御論辨ニ對シ
拙者一應之力辯論ヲ為シ置候ハ不
得止次第ニ有之候尤本件ニ付過日
来及御面詰置候次第モ有之候間不
遠湍足ノ結果ニ可至ハ不容疑ト存
候右得貴意度如斯候敬具

明治十六年二月廿七日

外務卿井上馨

大不列顛特命全權公使

カー、ハルリー、エス、パークス閣下

第三

以書東啟上致候陳ハ長崎港外國人
墓地ノ所在地大浦郷ハ人家ニ接近
シ衛生上有害ノ恐レアルヲ以テ向
後新タニ同地ニ埋葬スルヲ禁シ
更ニ浦上山里村ニ新設ノ日本人墓
地ノ一隅ヲ區畫シテ外國人通常埋
葬地トシ又浦上洲村墓地ノ一隅ヲ
區畫シテ外國人傳染病屍埋葬地ニ
供用ノ見込ヲ以テ同縣知事ヨリ新

埋葬地規則書相示シ在留各領事ニ
協議ヲ遂ケ候處何レモ異議無之從
來ノ墓地ヲ縣廳ニ於テ保管スル義
ナレハ知事ノ申出ニ同意致シ在東
京公使ノ承認ヲ請フヘキ旨回答有
之候趣ヲ以テ本年四月中談知事ヨ
リ本大臣及内務大臣へ上申有之候
ニ付詮議ノ未多少ノ金額ヲ國庫ヨ
リ支出シ本件認可致置候然ルニ各
領事ヨリモ右墓地變更ノ義數月前

候ノ下貴ノ字ヲ
脱セシナラレ

在東京各其公使へ報告致シタル處
未タ其承認ヲ得サル向有之由ニテ
本件協議今日迄落着ニ至ラサル旨
頃日談縣知事ヨリ申越候貴下ハ本
件ニ付貴國領事ヨリ報告ヲ受ケラ
レ候事ト存候就テハ未タ談領事へ
認可ノ御沙汰無之事ニ候ハ、速ニ
其御取計有之此有益ナル計畫ヲシ
テ早ク実効ヲ奏セシメ候様被致度
希望ノ至ニ候此段御照会得貴意候

英 國 大 使 官

敬具

明治二十年正月廿八日

外務大臣伯伊藤博文

大不列顛臨時代理公使

セ、オノレーブル、ポーウワ、ル、パウ、ル、トレンテ

貴下

第四

以書簡致啟上候陳ハ本年二月貴國
帆走船エミリー号兵庫港碇泊中全船
水夫長チャールズ、ミルスナル者艙口破封ノ
件ニ付同港税関長ヨリ貴國領事ハ
及告訴候処右告訴ノ趣意不相立旨
別紙寫ノ通裁決相成税関長ハ此裁
決不服ニ付在横濱貴國裁判廳ハ控
訴可致旨貴國領事ハ申入候如本件
ノ如キ刑事ニ就キ控訴ヲ許スノ規

則無之旨ヲ以テ回答相成候趣今回
其筋ヨリ申越候依テ全領事ノ判決
書一覽候ニ税関ノ封印ヲ破却シ該
船ノ艙口ヲ開キタル義ハ事實相違
ナキモ右ハ全ク失念不注意ヨリナ
シタルトニテ故意ニナシタル次第
ニ無之旨被告申立タルヲ同領事ニ
於テハ貿易章程第二則第三項ノ日
本文ニ封印ヲ破却シ貨物ヲ取出タ
ル云々ノ文面ヲ指示シ設令税関ノ

封印ヲ破却スルモ其目的貨物ヲ引
出ントスルニアラサル限リハ決テ
貿易章程違反ノ行為ニ無之トノ測
定ヲ以テ本訴却下相成候全領事ノ
判決ハ單ニ日本文ノニニ憑據シ日
英條約第廿一條ノ緊要ナル文面即
チ和蘭譯文ヲ以テ原トスヘシトア
ルヲ等閑ニ付セラレタルトト相見
候即チ本訴ノ所論ニ係ル該箇條ノ
英譯文ト和蘭譯文トハ其意義全ク同

一ニ有之候若シ全領事ノ之ヲ解釋
セラレタル如ク税関官吏ノ封印ヲ
勝手ニ取除クモ脱税ヲ謀ルノ念ヲ
以テナシタルト分明ナラガレ限リ
ハ之ヲ罰セサルモノトセハ封印ヲ
附スルハ全ク無効ノ虚式タルニ過
スレテ固ヨリ右様ノ筋不可有之義
ハ閣下ニ於テモ容易ニ御了解可相
成ト信用致候殊ニ今回在兵庫貴國
領事廳ノ裁決ハ昨年中我税関

ヨリテエス、ヒゴツトナル人ヲ相手取り
告訴ニ及ヒタル節ノ貴國領事ノ判
決トハ大ニ反對致シ右兩事件トモ
其事状ハ殆レト同一ニシテ其判決
ニ至リテハ符合不致候就テハ貴國
法廷ニ於テ控訴ノ規則如何ハ暫ク
措キ抑本件ハ条約文面ノ解釋ニ涉
リ候義ニ付閣下ノ御注意ヲ煩シ將
来如此誤謬ナカラシメ併テ今回ノ
在兵庫貴國領事裁判廳ノ錯誤ヲ矯

英 國 元 年 任 館

正スルノ御處分有之候様致冀望候
右得貴意候敬具

明治十七年五月廿七日 外務卿井上馨

大不列顛特命全權公使

セ、オノレীগブル、エフ、アル、ブラレケツト閣下

第五

本年五月廿七日附拙簡ニ對シ去ル
七月十日附御回答ノ貴簡致落手候
然ハ神戸税関長ヨリ貴國船ミリノ號
ノ水夫長ニ係ル訴訟ニ付過般全港
貴國裁判所於テ宣告セシ裁決ノ義
ハ税関長ニ於テ在日日本貴國法廷ノ
上訴手續ヲ未タ充分盡サ、ルニ付
右手續ヲ尽シタル上ナラテハ閣下
於テ之ヲ外交上ノ談判ニ附シ御處

英 國 元 年 任 館

分相成候義ニ至リ兼候旨御申越ノ
趣致承知候且先年貴國日本裁判所
ノ判決ニ依レハ特別ノ格例ニ基キ
刑事原告人ヨリ在兵庫英國裁判所
ノ申渡ニ對シ控訴スル途有之候趣
並ニ右ノ判決ハ破毀セラレサル限
リハ在兵庫貴國裁判所ニ於テ之ヲ
守ルヘキ筈ニ有之而ノ其事ハ曩ニ
其判決ニ關係シ現ニ控訴人タリシ
税関長ニ於テ必ス承知アルハキ筈

ニ有之趣ヲモ御示諭相成辱ク存候
右御申越ハ判決ハ蓋シ一千八百八
十一年十二月在兵庫貴國裁判所ニ
於テ審問相成候原告税関長代理ヨ
リ被告香港上海銀行ニ係ル案件ノ
事ナルヘシト推察致シ候処刑事訴
訟ニ付原告ヨリ特例ノ申立ヲ以テ
貴國日本裁判所ニ控訴スル途アル
事ヲ判決セラレタルハ即チ此一例
ノミト思考致候而ノ拙者該件ニ付

在兵庫裁判所並ニ控訴裁判所ノ兩
廳ニ於ル訴訟手續及其判決ヲ寫ト
査閲致シ候處右兵庫裁判所ヨリ特
別ノ申立ニテ控訴ナセシトハウヅク
トリア第二十二乃至廿一ノ條例第四十
三章ニ從テ取計タルトト相見候即
チ其第二節ニ於テハ特例ヲ以テ控
訴申立ヲ出願スル期限ヲ最終判決
ノ日ヨリ後三日以内ト明記有之候
然ルニ今回不幸ニモ税関長ニ於テ

ハ此控訴ノ機會ヲ利用セサリレ事
ニ相見ハ之カ為メ在日本貴國法廷
ノ付與セル上訴ノ便宜ヲ失ヒ時期
遷延相成候事ト存候加之本訴ノ被
告人ハ目下右法廷ノ管轄外ニ在ル
ヲ以テ其處分ハ之ニ及ハサル次第
ニ有之候ニ付テハ本来法律ヲ心得
サルノ故ヲ以テ上訴ヲ申立テサル
有力ノ口實トスルトハ難相成儀ニ
候得共一應本訴ノ事情御考察相成

候ハ、則我税関官吏ニ怠慢ノ譴責
ヲ歸スヘカラサルヲ明亮相成可申
ト存候實以テ彼ノ香港上海銀行ニ
係ル案件ノ如キハ其事情甚新奇ナ
ル所多ク審案ヲ經ルニ及レテ頗ル
錯雜ヲ極メタルカ故右ノ案件ニ付
テ定メラレタル主義ヲ税関長ニ於
テ他ノ全ク異別ナル詞詔ニ適用ス
ヘキヲ悟ラサリシモ亦驚クニ足
ラサル義ニ有之閣下ニ於テモ御同

辨辨
國國
六六
任任
館館

意ノ事ト察候且其事ヲ辨ヘガリシ
ハ獨リ税関長ニ止マラザリシトニ
相見ヘ申候其次第ハ其後税関長ニ
於テエミリノ号事件ニ就キ控訴ノ手續
ヲ在兵庫貴國領事ニ問合セタル砌
初メハ同領事ヨリ刑事ノ原告人ハ
控訴スルヲ得ストノ旨ヲ回答有之
其後又税関長ヨリ刑事訴訟ニ於テ
モ原告ヨリノ控訴ヲ該法廷ニ於テ
受理セシ先例有之トノ陳述ニ對シ

在國大使官

同領事ヨリノ再答ニハ記録ニ就テ
調査セシニ或ル時情ニ依テハ法律
ノ點ニ於テ刑事原告人ノ請願ニ應
シ其控訴ヲ認可セシテアルヲ發見
シタレ凡其之ヲ認可シタル場合ハ
今般エミリ、號事件ノ被告タルチアールス、
ミル子ルニ係ル訴訟ノ場合トハ大ニ異
ナリトノ旨ニ有之候是ニ由テ之ヲ
觀レハ刑事控訴ニ関シ貴國日本裁
判所ニテ曾テ所定ノ主義アルトニ

英國大使館

氣付カサリシハ獨リ右控訴人ノミ
ナラス即チ現ニ該控訴ヲ認可シタ
ル裁判所ニ於テモ亦全断ノ事ト相
見ヘ申候
本件ニ付拙者ヨリ斯ク再應及御照
會候次第ハ御申越ノ通閣下ノ御職
權ニ屬セサル事件ヲ重子テ辯論ス
ルノ趣意ニハ無之唯々這回エミリ号
案件ノ判決ヲ以テ我政府ハ貿易規
則ノ明文ニモ又其精神ニモ協ヘリ

英國大使館

ト思考セサル儀ヲ判然記録ニ存シ
置カレト欲スル迄ニ有之候間此段
御諒會有之度候而ノ今般ノ事件ハ
控訴ヲ得ヘキ事柄ナルニ其手續ヲ
愆マリタレハトテ其事實ヲ以テ將
来ノ先例トナス可キ者ニハ無之又
今回在兵庫裁判所ノ判決ハ法律上
ノ覆審改三ヲ遂サルノ故ヲ以テ過
當ノ効力ヲ之レニ付スヘキ者ニ無
之儀ト信用致候閣下於テハ平生信

英國大使館

實ノ御好意ヲ表示セラレ今又本件
類似ノ案件ニ関スル貴國裁判所ノ
手續ヲ懇切ニ説明セラレタルヲ見
レハ閣下於テハ假令法廷ノ裁可ヲ
得タル者ト雖モ苟モ條約上我國ノ
享有セル権理ヲ障害スルカ如キ事
件ハ之レヲ除却セレテヲ拙者全様
御希望被成候事判然致候右得貴意
度如此御望候敬具

外務卿代理

英國大使館

明治十七年十一月七日

外務大輔 吉田清成

英 國 大 使 館

大不列顛國特命全權公使

ゼ、オノレーブル、エフ、アル、ブラレケツト

閣下

第六

覺書

英國特命全權公使閣下ヨリ本年五月十八日附覺書ヲ以テ申出ラレタル臺灣諸港ニ於ケル帝國稅關ニテ英國漁船ヤエレス號外ニ艘ニ對シ賦課シタル噸稅ノ幾分還付方請求ノ件ニ關シテハ抑帝國政府ニ於テハ臺灣ガ日本帝國領土トナリシ以來曩キニ出来得ル限現行條約ヲ該島ニ

英國大使館

適用スベシト宣言セシトキニ至ル迄該島ニ於テ總テ清國ニテ施行セシ税關慣行規則ヲ襲用シ居リタリト雖モ本件ニ限り特ニ酌量ヲ加フベキ事情アルモノト思考セシヲ以テ是迄該船舶ニ賦課セシ噸税ノ内ヨリ帝國ト清國トノ間ニ臺灣ヲ受渡セシ以來現行條約ヲ該島ニ適用スベキ旨ヲ宣言セシトキニ至ル迄該船舶ガ該島各港ニ入港セシ度數

ニ應シ日本本部ニ於テ現ニ外國船舶ニ課スル所ノ入港出港兩手數料ヲ差引キ其殘額ヲバーン商會ニ還付スルコトニ決定シ其旨帝國拓殖務大臣ヨリ臺灣總督ヘ訓令セリ

明治二十九年六月旨 東京外務省ニ於テ

第七

以書翰致啟上候陳者英國人トクトル、
フラレシス、マーフアー氏昨年九月中横濱ニ
於テ誤テ勾引セラレ為テニ衆港行
乗船券ヲ無効ナラシメタルヨリ衆
リタル實費損害金ニ對スル賠償請
求ノ儀ニ關シ英國政府ノ訓令ニ依
リ本月十日付第十七號貴翰ヲ以テ
御照會ノ趣了悉致候
右トクトル、マーフアー氏カ我警察官ニ誤

認セラレタルカ爲メニ獨リ勾引ノ
屈辱ヲ受ケタルノミナラス併セテ
金錢上ノ損害ヲモ蒙ルニ至リタル
ノ不幸ハ帝國政府ノ遺憾トスル所
ニ有之候得共之カ爲メ同氏カ被リ
タル損害ニ對シテハ帝國刑事訴訟法
第十四條ニ於テ司法當該官吏カ被
告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ
又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル
場合ノ外要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得

英
國
大
臣
官

サ
ル
コ
ト
、
相
成
居
候
ニ
付
乍
遺
憾
救
済
ノ
途
無
之
候
間
右
様
御
諒
察
相
成
度
希
望
致
候

右
回
答
旁
本
大
臣
ハ
茲
ニ
重
テ
閣
下
ニ
向
テ
敬
意
ヲ
表
レ
候
敬
具

明
治
三
十
六
年
三
月
廿
五
日

外
務
大
臣
男
爵
小
村
壽
太
郎

大
不
列
顛
特
命
全
權
公
使

カ
シ
、
ク
ロ
ー
ト
、
ワ
ッ
ク
ス
ウ
エ
ル
フ
ク
ト
ナ
ル
ト
閣
下

英
國
大
臣
官

第八

以書翰致啟上候陳者貴國臣民エフジ
エーバーテンス_レ氏借地ノ前面ニ當ル海面
埋立ニ對スル苦情ノ件ニ關シ本年
二月十八日附書翰ヲ以テ申進候義
有之候處右ニ對シ三月十七日附貴
翰ヲ以テ同氏ヨリ更ニ差出シタル
書面相添御回答相成致閱悉候
右_レハーテレス_レ氏ノ陳述ニ依リ本大臣ハ
本件ニ關スル閣下ノ前翰ニ對シ更

ニ詳答ヲ為スコトヲ得ルニ至リ候
得共然カモ右陳述ニハ尚明瞭ヲ欠
ケル點不尠様被存候
同氏ノ所陳ニテハ帝國官廳ノ行為
ニ依リ干潮點迄ノ土地ヲ失ヒタリ
トノコトニ有之又借地券ニ掲グル
條件ニ準據シ自分ハ兵庫ホテル地所
ノ借地人トシテ永代右地所ノ前面
ナル潮着キ地ヲ占有スベキモノナ
リトノコトニ有之是ニ因テ之ヲ觀

新編
皇國
水
傳
館

レバ同氏ニ於テハ前面ノ濱地ニ對
シ實際使用及占有ノ權利アルコト
ヲ主張スルノミナラズ該權利ノ享
有ヲ剝奪セラレタリト主張スルモ
ノト看做サガルヲ得ガル次第ニ有
之而シテ同氏ノ意志ニシテ若シ果
シテ右ノ如キコトヲ主張スルニ在
リトセバ其ノ主張ノ當ヲ得ガルコ
トハ以下ニ述フル所ノ事實ニ依リ
テ之ヲ証スルニ足ルベク恐ラク閣

皇國
水
傳
館

下ニ於テモ御同見ニ可有之ト存候
第一ニ同氏及同氏ノ前借地人ニ於
テ是迄嘗テ右前面ノ濱地ヲ占有セ
レコト無之候得者此點ニ付同氏ハ
損失ヲ受タリトイフコトヲ得サル
次第ニ有之第二ニ兵庫「ホテル」地所ノ
借地者中是迄嘗テ其所謂權利ナル
モノヲ右前面濱地ノ使用及占有上
ニ實行セレント企タル者無之ノミナ
ラズ同氏モ亦同氏ノ前借地人モ殆

ト三十箇年ノ久シキニ涉リテ其所
謂權利ナルモノヲ高閣ニ束子置キ
タル次第ニ有之又同氏ハ其ノ所謂
水際權ナルモノハ借地券ニ掲ゲラ
レ常ニ其ノ現借地ニ伴フバキ所ノ
條件ニ準據スヘキコトヲ認ムルニ
拘ハラズ右前面濱地ニ對シテハ未
ダ嘗テ該條件ノ最重要ナルモノ即
チ借地料ノ支拂ヲ履行シタルコト
ナク又之ヲ履行セレント申出タルコ

トモ無之候將又借地券ノ日本文ノ
方ニハ同氏ノ苦情ノ根據トナリ居
ル所ノ文句相見ハ居ラザル義ニ付
本大臣カ前翰中ニ指點セシコトハ
閣下ニモ御記臆ニ可有之當時本大
臣ハ猶ホ未ダ本件ノ價値ニ付十分
ノ審査ヲ遂ゲ居ラザリシヲ以テ此
事實ニ關シ論議ニ涉ルコトヲ適當
ト認メザリシ次第ニ候得共若シ其
際本大臣ヲシテ右ニ關スル意見ヲ

英領事館
大
使
官

述ベシメタラシニハ昨三十年十一
月二十三日附貴翰中ニ御陳述ノ借
地券ノ日本文ノ方ハ結約者ニ向テ
何等ノ拘束カヲモ有セザルモノナ
リトノ御意見ニハ賛同致サバ
ルベク候抑々借地券ノ日本文ハ右文券
ノ不可離的部分ニ有之ヲ以テ何
等ノ目的モナク調製シテ借地券ノ
一部トナシタルモノナリトハ申シ
難キ義ト存候固ヨリ本大臣ニ於テ

英領事館
大
使
官

テモ全ク之ノミニ依リテ總テノ問
題ヲ決定セシト主張スル次第ニハ
無之候得共然カモ全然之ヲ眼中ニ
置カサルカ如キハ原結約者ノ意志
ヲ無視スルモノナリト言フヲ憚ラ
ズ候夫ノ英文ノ方ニ明確ナラザル
所アル場合ニ當リテ其ノ用語ノ真意
ヲ發見スル為メ日本文ノ方ヲ照合
スルカ如キハ最至當ノコト、致思
考候然リ而シテ本件ニ付テハ日本

文中ニ前面濱地ニ關スル規定ナキ
一事ヲ殊ニ輕ク看過スヘカラザル
事情有之候即チ該借地券ハ外國人
ニ神戸居留地外ニテ土地ヲ借受ル
コトヲ許シタル慶應四年三月七日
ノ取極ニ基キテ作成セラレタルモ
ノニ有之候處該取極ニハ明示的ニ
濱地ヲ此ノ雜居地區域ヨリ除外致
居リ而シテ本件ノ問題トナリ居ル
所ノ濱地モ申ス迄モナク此中ニ包

含セラレ居ルモノニ有之候本大臣
カ此取極ヲ引照スル所以ノモノハ
神戸地方官廳ガ付與シタル借地券
ノ効力如何ニ付疑ヲ容レントスル
ガ為メニアラサルコトハ閣下ニ於
テモ御諒承相成度此等ノ文券ガ實
際其券面ニ載セラレタル丈ノ土地
ニ對シテ有効ナルコトハ固ヨリ申
迄モ無之義ニ候得共同氏ガ有スル
借地券ノ日本文ト英文トノ間ニ不

英
國
力
保
館

同アルコトニ付該取極ヲ引照シタ
ル所以ハ元來濱地ハ該取極ヲ以テ
明カニ公共ノ目的ノ為メニ保存セ
ラレタルモノナルカ故ニ當初結約
者間ニ該借地券ヲ以テ前面濱地ニ
關シ何等有形ノ權利ヲモ付與スル
ノ意志ナカリシコトヲ立證セレカ
為メニ有之候又同氏が主張スル所
ノ權利ノ性質ニ關スル問題ヲ別ニ
シテ之ヲ論スルモ該借地券ニ在ル

英
國
大
使
館

干潮點迄ナル文字ハ讓與ノ語ナル
ト同時ニ制限ノ語ナルベク隨テ其
權利ハ如何ナルモノナルニモセヨ
又今尚依然存在スルモノトスルモ
決シテ之ヲ該借地券調製ノ時ニ現
存セシ所ノ干潮點以外ニ迄及ブベ
キモノニ非ラズト相信シ候又該借
地券ニハ境界線ヲ以テ借地ヲ指定
シ其ノ貸渡シタル坪數ヲ記シ一坪
一分ノ割ニテ其借地料ノ數額ヲ

英
國
大
使
館

定メ且遲延ナク右ノ借地料ヲ仕拂
フニ於テハ其土地ヲ安穩ニ占有シ
得ベキコトヲ保障シ有之而シテ此
等規定ノ動カスベカラザルモノタ
ルコトハ申迄モ無之候處帝國政府
ニ於テハ干潮點ナル文字ヲ以テ指
定セラレタル境界モ亦同ク動カス
ベカラザルモノト致思考候
以上本大臣ノ所陳ニシテ幸ニ帝國
政府ノ所見ヲ閣下ノ前ニ明カナラ

英
國
大
使
館

シメタリトスルトキハ閣下ニ於テ
モハーテレス氏所持ノ借地券中ニ許與
セラレ居ル水際權ナルモノハ前面
濱地ノ使用及占有ノ權利ヲ包含ス
ルモノニ非ラス又該借地券調製ノ
日ニ現存セレ所ノ干潮線以外ニ及
ブベキモノニ非ストノ本大臣ノ意
見ニ御同意可相成ト致確信候
又ハーテレス氏が其書翰中ニ列擧シテ
以テ帝國官廳ノ為メニ侵害セラレ

英
國
大
使
館

タリト主張スル所ノ前面濱地ノ地
役權ナルモノニ至テモ亦帝國政府
ニ於テハ同ク正當ノ根據ナキモノ
ト相認候抑々同氏が列擧スル所ノ
地役權ノ一ハ水際又ハ前面濱地ニ
屬スル權利ニ有之候處同氏ニ於テ
右權利ノ性質ヲ擧示セサルヲ以テ
本大臣ハ之ガ價值ニ付研究ヲ加フ
ルニ由ナク候得共水際又ハ前面濱
地ニ屬スル權利ナルモノアリテ兵

英
國
大
使
館

庫「ホテル」地所ノ借地人ニ屬シ居ルト
ノコトハ本大臣が未ダ嘗テ識認セ
サル所ニ有之候又此他同氏カ主張
ヨリ眺望ヲ妨ゲラレガルコト及ホ
テ「ル」トシテノ位置及公衆ニ認メラ
レ易キコト等ニ有之候處此借地ニ
在ル所ノ建物ハ既ニ久シキ以前ヨ
リ「ホテル」用ニ供セラレガルニ至リタ
ルヲ以テ該建物ノ以前ノ使用目的

英
國
大
臣
官

ノ為メニ求メラレタル所ノ特別ノ
考慮ハ之ヲ論外ニ置クモ至當ノ義
ト存候又同氏が主張スル所ノ眺望
ノ權利ナルモノハ遙カニ潮着キ地
以外ニ涉リ實際全港ヲ其中ニ包含
スルモノニ可有之是レ畢竟一ノ眺
望權ニ外ナラサル義ニ有之然ルニ
此ノ如キ例外ノ性質ヲ有スル所ノ
地役權ハ明示ノ許與アリタル場合
ニ限り存在スベキコトハ今日多數

英
國
大
臣
官

ノ邦國ニ於テ認ムル所ノ原則ナリ
ト相信候
以上陳述シタル所ニ依リ帝國政府
ニ於テ該借地券中ニ在ル水際ニ關
スル文字ハ明カニ干潮點迄ニ限ル
モノニシテ決シテ該點以外ニ於テ
「ハーテンス」氏ノ主張スルカ如キ權利ノ
存在スルコトヲ證スルモノニ非ラ
ズト信ジ居ルコト又前ニ述ベタル
カ如キ眺望權ハ該借地券ニ載スル

邦國ノ原則ナリ
帝國政府
信候

所ノ他ノ文字ヨリ推スモ發生スベ
キモノニ非ラズト信ジ居ルコトハ
閣下ニ於テモ御了承相成候義ト存
候
以上ノ所陳ハ閣下ト本大臣ト共
ニ知悉スル所ニ基キタル義ニ有之
候處右ノ外「ハーテンス」氏ニ於テ言及セ
ズ隨テ閣下ニモ未ダ御承知不相成
居哉モ難科事實ニシテ本件ノ問題
ヲ論スルニ當リ頗ル重要ナル關係

英國大使官

ヲ有スルモノ有之候尤本大臣ハ今
茲ニ之ニ付何等ノ論決ヲモ下スノ
必要無之候得共此等ノ事實ヲ陳述
シテ閣下ノ御注意ヲ請フコト適當
ト相信ジ候抑々本件ノ主張ノ根據
トナレル借地券ハ千八百六十八年
五月八日ノ日附ニ有之候處其後殆
ト六年即チ明治七年四月一日ニ至
リ同地方ニ在ル帝國官廳ハ「ゼーデー
カール」高會ノ為メニ一ノ借地券ヲ發

シ兵庫「ホテル」地所ノ海側前通ノ全長
ニ涉リ一端ハ幅九呎一端ハ幅四呎
ノ地所ヲ貸渡候此許與ノ直接ノ結
果トシテ公共道路ハ更ニ海ノ方へ
推出サレ防波堤ハ干潮點以外少許
ノ處ニ築造セララルコトナリ潮
水ノ満干ハ實際其痕ヲ防波堤ノ側
面ニ印スルニ至リタルノ事實ニ有
之候本大臣ハ右借地券寫ヲ今茲ニ
封入シテ閣下ノ尊覽ニ供スベク尤

右ハ「ハーテレス」氏ニ於テモ亦所持シ居ルコト、存候而シテ此借地券ニ依リ貸渡シタル地所ハ兵庫「ホテル」地所ト前面濱地トノ間ニ在ルモノナルニ拘ハラズ該借地券中ニ水際權ニ關スル何等ノ留保規定モ無之義ハ頗ル注意スベキ點ニ有之閣下ニ於テモ必ズ御注視可相成義ト相信候終ニ臨ミテ申進度ハ帝國政府ニ於テハ自己ノ行為ニ對スル責任ヲ免

英領事館

レト欲スル考ハ毫毛無之候得共國家ノ權利及神戸ノ如キ益ニ盛大發達ニ赴ク高業地ノ利便ニ關スル問題ニ付テハ一箇人ノ苦情殊ニ前記ノ權利ト牴觸シ前記ノ利便ヲ妨害スヘキ例外的ノ苦情ノ如キハ嚴正ニ之ヲ解釋セザルベカラザルモノナリト思考スルノ一事ニ有之候右御回答旁本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

英國大使館

明治三十一年六月二十九日

外務大臣男爵西德二郎

大不列顛特命全權公使

サリ、アーネスト、メーソン、サトウ閣下

第九

以書翰致啟上候陳者英高ハルム兄弟
高會カ東京橫濱間ノ解船運漕業ヲ
禁止セラレタル件ニ關シ客年夏季
中貴公使館ト當省トノ間ニ照會涉
渡ノ次第閣下ヨリ貴國外務大臣ニ
報告相成同大臣ハ之ヲ法律顧問官
ノ審議ニ附セラレ候處其結果トシ
テ閣下ハ更ニ本問題ニ關シ專ラ法
律上ノ觀察點ヨリ前回御照會ノ趣

旨ヲ補足スヘキ旨訓令ニ接セラレ
候由ニテ先ツ千八百六十七年ノ取
極ニ據テ外國人カ東京ニ居住シ及
ヒ其貨物ヲ舩舩ヲ以テ該市ト横濱
トノ間ニ運搬スルノ特權ヲ許與セ
ラレ此特權ハ千八百九十四年ノ新
條約實施後モ約三ヶ年間即チ千九
百〇二年ノ春季ニ至ル迄引續キ享
受セラレタルノ事實ヲ擧ケ次ニ千
八百九十四年ノ新條約第三條第三

英
國
領
事
館

項ノ明文ヲ引接シテ英國政府ハ專
ラ該條項ノ正當ナル解釋ニ據テ東
京ハ従前開カレタル範圍ニ於テ換
言スレハ横濱トノ間ニ於ケル舩舩
等ノ運漕業ニ依テ外國通商ニ開カ
レタル場所ト見做サレサル可カラ
ス而シテ該條約中ニハ従前東京ニ
於テ存在シタル權利及特權ヲ制限
スルノ意志ヲ表示セル條項ナキヲ
以テ英國臣民ハ舩舩運漕業ニ關シ

英
國
領
事
館

該條約以前ニ存在シタルト同一ノ
特權ヲ依然享有シ得ヘキ答ナル旨
去ル五月十五日付第三十五號貴翰
ヲ以テ御來示ノ趣了承致候
右閣下ノ主張セララル、論據ハ專ラ
千八百九十四年ノ新條約第三條第
三項ノ解釋ニ在ルヲ以テ果シテ該
條項カ閣下ノ主張セララル、如ク千
八百六十七年ノ取極ニ據テ外國人
ニ許與シタル東京橫濱間ノ解船運

漕業ノ特權ヲモ包含シテ規定セラ
レタルモノト正當ニ解釋シ得ラル
、ヤ否ヲ考フルニ同條項ニハ締約
國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖
内ノ各地諸港及諸河ニシテ外國通
商ノ為メ開カレ又ハ開カルヘキ場
所へ船舶及貨物ヲ以テ自由ニ到ル
ヲ得トノ規定アルヲ以テ先以テ所
謂ル外國通商ノ為メ開カレタル場
所ニ船舶及貨物ヲ以テ自由ニ到ル

ヲ得ルハ同一國版圖内ノ他ノ場所
ヨリ來ル場合ヲモ意味スルヤ將タ
其國版圖以外ノ場所ヨリ來ル場合
ニ限ルモノナルヤ及ヒ東京ハ果シテ
該條項ニ所謂ル外國通商ノ為メ開
カレタル場所ナルヤ否ノニ點ヲ考
察セサル可カラスト存候按スルニ
右第一ノ點ニ就テハ外國通商ノ為
メ開カレタル場所ハ船舶及貨物ヲ
以テ自由ニ到ルコトヲ得ルハ帝國

邦國
通商
條約
第十
一條

ノ場合ニ於テ之ヲ言ハハ必ス帝國
版圖外ノ場所ヨリ來ル場合ニ限ラ
サル可カラスト何トナレハ帝國ノ版
圖内ニ於テ一ノ場所ヨリ他ノ場所
ハ船舶及貨物ヲ以テ到ルハ其船舶
ノ如何ナル種類タルヲ問ハス又貨
物ノ内國品タルト外國品タルトヲ
論セス均シク是レ沿岸貿易ナレハ
ナリ而シテ沿岸貿易ニ就テハ閣下
御承知ノ如ク新條約第十一條ニ於

邦國
通商
條約
第十
一條

條地無之ト存候故ニ帝國政府ハ旧
取極ニ據ル東京橫濱間ノ船舶運漕
業ノ特權ハ新條約第三條第三項ノ
規定中ニ包含セララル、モノニ非ス
ト断定セサルヲ得スレテ同條項ニ
對スル貴國政府ノ解釋ニ同意スル
コト能ハサルハ遺憾トスル所ニ有
之候

又閣下ハ新條約中ニハ従前東京ニ
於テ存在シタル權利及特權ヲ制限

スルノ意志ヲ表示セル條項ナキ旨
御申越相成候處凡ノ新條約カ旧條
約及取極ヲ廢棄シテ之ニ代リタル
場合ニ旧條約及取極ニ依テ與ヘラ
レタル權利及特權ニシテ新條約中
之ニ關シ何等ノ規定ナキトキハ其
ノ之ヲ規定シタル旧條約若クハ取
極ノ廢棄ト共ニ消滅スハキハ自然
ノ結果ニ有之左レハ千八百六十七
年ノ取極カ新條約第二十條ノ規定

ニ據テ旧條約及之ニ附属セル其他ノ約定等ト共ニ無効トセラレ而シテ該取極ニ據テ外國人ニ許與セラレタル東京橫濱間ノ解船運漕業ノ特権カ新條約第三條第三項ノ規定中ニ包含セラレサルハ既ニ前假説明ノ如クニシテ尚ホ其他ノ條項ニモ之ニ關レ何等ノ規定無之ニ付テハ此等ノ特権ハ即チ新條約ノ實施ト同時ニ自然消滅ニ歸レタル儀ニ

英
國
大
使
館

有之候

右回答旁本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

明治三十六年七月十六日

外務大臣男爵小村壽太郎

大不列顛特命全權公使

サ、クロフト、マックスウエル、マクドナルト閣下

英
國
大
使
館

覺書

帝國外務省ハ日本ニ於ケル外國保
 險會社ノ納ムハキ供託金ノ件ニ關
 スル英國公使館ノ覺書ヲ受領セリ
 右覺書ニ列記シタル質問ニ對シ外
 務省ハ主務官廳ト協議ノ上左ノ如
 ク回答ス

- 一、外國保險會社ハ最初ニ現金
 ヲ供託シ其後ニ至リ之ヲ公債
 ニ交換スルトモ若ハ最初ニ公

債ヲ信託シテ後ニ之ヲ現金ニ
支拂スルトモ何レモ差支ナシ
二 現行規定(明治三十二年大藏
省令第百六號第十五條)ニ據レハ
信託金ノ利息ハ唯々其元金ノ
拂渡シト同時ニ支拂ハルルコ
トトナリ居レリ但シ此點ニ就
テハ可成外國保險會社ニ便宜
ヲ與フルノ見込ヲ以テ同下關
係官廳ニ於テ審議中ナリ

英國
國
大
使
館

三、公債ノ利子ハ期限毎ニ信託
人ニ支拂ハルヘシ
四、朱利附英債公債ハ信託金
ニ代ハルヘキ有價証券トシテ
認許セラレサルヘシ
帝國外務省ハ本覺書ヲ認ムルニ際
シ下ノ通知ニ接シタリ曰ク本件信
託金ハ來ル十月三十一日迄ニ納付
スヘキ筈ノ處農商務大臣閣下ハ右
期限ヲ來明治三十七年一月三十一

英國
大
使
館

英
國
公
使
館

日迄延期スルニ決定シ此旨各外國
保險會社ニ通牒セラルル筈ナリト
因テ茲ニ是ヲ附記シテ英國公使館
ノ參考ニ付ス

明治三十六年九月十八日

第十一

并啟益御高安奉賀候陳者万事後進
ナル本邦ハ殊ニ海上ニ於ケル事業
ニ後進ナル事ハ閣下ノ親シク目睹
セララル、所ナルヘク候沿岸八千海
里以上ヲ有セル本邦ニテハ真ニ耻
入ル次第ニ候得共如何トモ致方無
之只漸次發達ヲ期スル外道アルハ
カラス候元來船舶製造ノ術幼稚ナ
ルト習慣ノ動カスヘカラサルモノ

英
國
公
使
館

アリテ船体ノ完備ヲ欠ク故ニヤ船籍ニ登録セル漁帆船及五十石以上ノ大船ノミニニテモ毎年六百艘ノ遭難ヲ来シ三十六ニ對スル一隻ハ遭難スルノ割合ニ相成居殊ニ小船ハ統計ノ徵スヘキモノナキモ猶全割合以下ニアラストスレハ毎年約九千隻ノ遭難アリト見テ大ナル過失ナカルヘク候如此危険ヲ極メタル海岸ヲ有シナカラ救濟ノ制度十分

ニ沼定セラレス僅ニ十五年前明治廿二年ノ創立ニ係ル帝國水難救濟會アリテ之レカ防止ヲ計リ居ルノミニ候該會ハ明治卅年度ヨリ一部國庫補助ヲ受クル民間有志者ノ義侠ヨリ成立スル所ニシテ目下設置セル救難所ハ二十三個所ニ有之猶百余個所ノ豫定個所ヲ有シ居候然ルニ前述ノ如ク多數ノ遭難者ヲ来スニモ拘ハラス器具ハ一トシテ本

邦人ノ設計ニ係ル完全ナルモ、無
之悉ク外國品ヲ用井来リ只本邦固
有之漁船ニ改良ヲ加ヘタル救助船
有ルノミニ有之候然ルニ先年来小生
ハ之ヲ該會ノ會長ニ承ケ居リ候ニ
付組織ヲ始メテ救助船救助具等ニ
至ルマテ着々改良ヲ加ヘ擴張シ發
達シ得ラル、限心カヲ盡シテ之レ
ニ當ルヘキ考ニ有之種々苦心罷在
候得共何分本邦ニテハ未タ何等參

考スヘキモ、モ無之候ヨリ一層苦
心ヲ重子居ル事ニ有之候然レトモ
此不完全ナル救助船救助具ヲ以テ
スラ猶創立以來昨年九月ニ至リ大
小ノ船舶千四百十五隻人負七千四
百六十七人ヲ救濟致タル事ニ有之
候貴國ハ夙ニ本救濟事業ノ完備ヲ
圖リ實蹟日ニ好良ナルヲ承居リ常
ニ欽羨ニ堪ヘサル所ニ有之候就テ
ハ組織及器具之レカ維持又ハ擴張

ニ要スル費用等果シテ御取調相成
居候モノ有之候ハ、後進本邦水難
救濟事業ノ為ニ御教示ノ榮ヲ得度
右御状諾被下候ハ、小生ハ之ヲ参考
トシ本邦ニ於テ出来得ル限りノ改
良完備ヲ圖リ微力敢テ當ラスト雖
モ遙ニ貴國ノ本事業ニ相應シテ着
々成蹟ヲ舉ケ以テ萬國共通ヲ事實
ニ現ハシ可申決心ニ有之候何卒微
衷御洞察被下本事業ノ為ニ一臂ノ

勞ヲ吝マサラレコトヲ伏テ企望仕
候勿々頓首

明治三十六年四月廿五日

大日本帝國水難救濟會

會長伯爵吉井幸藏

大英國

特命全權公使サリクロード、マクドナルド閣下

第十二

以書翰致啟上候陳者去月三十一日
 附第三十一號貴翰ヲ以テ暴行罪ノ
 刑事被告人タル貴國砲隊砲手トラス、
 トロクナル者香港ヨリ當國ニ向テ逃
 亡致候様被察候趣ニ付テハ從前ノ
 例ニ依リ今回モ亦追テ香港ヨリ派
 遣セラルヘキ當該官吏ハ引渡ス迄
 見付ケ次第句留ノ為メ帝國政府ニ
 於テ逮捕ノ命令ヲ發シ得ヘキヤ否

英國大使館

英國大使館

御問合ノ趣致閱悉候一昨年十一月
中同様ノ件ニ付サ、ア、子スト、サトウ閣下ヨ
リ御来示有之候節前任西園寺候爵
ヨリ同月二十九日附書翰ヲ以テ貴
我兩國間ニハ犯罪人引渡條約存在
不致居候ニ付テハ今後之ヲ以テ先
例トセラル、コトハ帝國政府ノ欲
セサル所ニ有之候旨申進置候義ニ
有之乍遺憾何分御請求ニ應レ兼候
間右様御承知相成度此段回答旁本

大臣ハ茲ニ重テ貴下ニ向テ敬意ヲ
表シ候敬具

明治三十年六月一日

外務大臣伯爵大隈重信

大不列顛臨時代理公使

セラルド、ラウサー、貴下

第十三

本年四月二十八日長崎港ニ於テ英
國軍艦ヲラフトレ 躰乗組員ト人夫トノ
間ニ起レル争擾ニ就テハ内務大臣
ヨリ長崎縣知事ニ命ジテ當時ノ實
況ヲ取調シメシニ左ノ如キ事實ヲ
報告セリ

四月二十八日午前七時過長崎居留
地六躰波止場ニ於テ日雇稼ニ就業
スハキ人夫群集シ居ル處ハ英國軍

英
國
大
使
館

英
國
大
使
館

艦がラフトに號乗組水兵、レ、ホールの外五六
名來掛り該人夫等へ戯レ中、ホールのハ
暴行ヲ始メ數名ノ人夫ヲ毆打シ之
ヲ制止セシトシタル同所立番巡查
ニ對シテモ亦亂暴ヲ加へ到底一人
ノ巡查ニテ制止シ得サルノミナラ
ス却テ危險ノ場合トナリタルヲ以
テ漸ク他巡查ノ應援ヲ得テ之ヲ取
押へタリ然ルニ暴行ヲ受ケタル人
夫等ハ激昂シテ其周圍ヲ圍繞シタ

英領事館
大坂
伊豆
館

ルヲ以テ水兵ハ手ヲ振り或ハ足ニ
テ蹴ル等暴行到ラサルナキヲ以テ
群集ヲ制スルノ暇ナク然ル處水兵
ノ暴行益々劇シキヲ以テ己ムヲ得
ス之ヲ引致シタルモノナリ
本件ニ就テハ五月一日長崎駐在英
國領事ヨリ照會アリタルヲ以テ嚴
重ニ關係巡查ヲ取調タレトモ巡查
ニ於テ水兵ヲ毆打シタルノ事實無
之唯巡查田代行太ハ逮捕セラレタ

英領事館
大坂
伊豆
館

ル水兵ヲ引致スルニ當リ稍々粗暴
ノ取扱ニ涉リタル廉アルヲ以テ巡
査懲罰例ニ依リ罰俸ヲ科シタル上
轉署ヲ命シ五月二十日ヲ以テ其旨
英國領事ニ回答シタリ又水兵ヲ毆
打シタリトシテ英國領事ノ告發ニ
係ル人夫ニ對シテハ長崎地方裁判
所檢事ニ於テ其訴ヲ棄却シタル由
ナリ要スルニ本件水兵暴行ノ原因
ハ酩酊中ナリシヲ以テ人夫等ト些

ム
少ノ行違ヒヨリ生シタルモノト認
ム
右ノ事實ニ依レバ當該官廳ニ於テ
本件ニ關シ執リタル措置ハ失當ニ
非ズト思考ス
明治三十年七月九日

第十四

以書翰致啟上候陳者在臺灣貴國商
 店^{テ井レヨ}會社ノ支那人買辦ニ對ス
 ル樟腦稅金徵收ニ關スル集々街收
 稅官吏ノ處置ノ儀ニ付本年四月十
 四日附第二拾二號貴翰ヲ以テ御來
 示ノ趣致閱悉候右事實取調方早速
 其筋ハ致照會置候處右ハ昨明治二
 十九年十一月中前記會社ノ買辦人
 ニレテ樟腦營業人ナル集々街土人

英
 國
 大
 使
 館

陳水生外壹名ヨリ同會社へ賣渡
而シテ同會社カ本年一月中安平港
ヨリ輸出シタル若干ノ納稅濟ノ樟
腦中ニ於テ脫稅致シ居ル分發見
タル旨安平稅關ヨリ集々街收稅署
へ通知ノ次第有之候ニ依リ該收稅
署ニ於テハ右脫稅樟腦ニ對スル稅
金ヲ上納セシメレカ為メ二月中兩
度前記陳水生外壹名ヲ召喚致セシ
モ之ニ應ゼサリシヲ以テ同地在勤

警部ヲシテ前後二回説諭セシメタ
ルニ同人等ヨリ三月八日迄ニハ必
ズ納稅可致トノ受書差出置キタル
ニモ拘ハラヌ尚依然其通り履行不
致候ニ付其後復々同地出張官吏ヲ
シテ督促セシメタル次第ニ有之稅
金重納ヲ命ジ又監禁其他不法ノ干
渉致セシ等ノ儀ハ一切無之旨臺灣
總督ヨリ申報有之候間右様御承知
相成度此段回答旁本大臣ハ茲ニ重

テ貴下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

明治三十年六月十日

外務大臣伯爵大隈重信

大不列顛臨時代理公使

セラルド、ラウザー、貴下

第十五

以書翰致啟上候陳者客年九月十一日頃露領浦潮斯德ヲ距ル北方二百餘里ノホーカト稱スル沖合ニ於テ貴國軍艦ナレセシキ所屬ノ端艇壹艘轉覆シ士官四名溺死セシ趣ノ處同月三十日新潟縣人船乗業池田久太郎外五名漁業ノ為メホーカ灣ヲ去ル南方凡三里程ノ處ニ到リタルニ海岸ニ屍体ノ漂着セルヲ認メ其外套ノ

英
國
領
事
館

衣囊ニ金鎖付金側時計壹個アルヲ
發見シ六名共謀ノ上之ヲ竊取シ屍
體ハ陸ハ引揚ケ昆布ヲ以テ之ヲ覆
ヒ歸國ノ上該品ヲ新潟市ノ古物商
ニ賣却セルヲ探知候ニ付犯人六
名ハ逮捕ノ上國法ニ照シ相當ノ處
分ヲナシ竊取品ハ轉々シテ原形ヲ
失シ指環等ニ變レタルモ尚公高ノ手
裡ニ在リシヲ以テ古物商取締法ニ
依リ徵收シ裁判所ヨリ警察官ニ交

付相成候趣ノ處右ハ全ク前記溺死
士官ノ所持品ニ相違無之ニ付被害
者遺族ハ交付相成度旨新潟縣知事
ヨリ上申有之候間別紙目錄ノ通現
品及御送付候條御取調ノ上遺族ハ
還付方可然御取計相成度右通牒旁
本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意
ヲ表シ候敬具

明治三十年一月二十三日

外務大臣伯爵大隈重信

大不列顛特命全權公使

サ、ア、子、ス、ト、メ、ソ、レ、サ、ト、ウ、閣、下

英
國
大
使
館

合計 六袋 目錄

内

一金指環 参個 相一六合セ目凡ソ四分位欠

金 捻 壹本

金 鎖 壹本

一 テンブ 壹ヶ 細石 壹ヶ

受石アレクル 壹ヶ 針 二ヶ

一 捻釘 二本 輪カホ 三ヶ

鐵釘 さ形ノモノ 壹ヶ

英
國
大
使
館

第十六

以書翰致啟上候陳者本年六月中貴
 翰ヲ以テ帝國各開港場ニ於テ輸出
 入商品ニ對シ課税ノ際一分銀ノ換
 算方内外人同一ナラサル義ニ關シ
 縷々御来意ノ趣致領承候右ハ其筋
 ニ於テ篤ト致取調候處内外人共其
 換算ヲ同一ナラシメントセハ外國
 人ノ納税ニ對シ帝國臣民ノ分ト同
 様明治十八年帝國大藏省告示第百

英
 國
 大
 藏
 省
 告
 示
 第
 百

- 一 大小ノイトウ ニケ
- 一 大小車 八個 凸形ノモノ壹ケ
- 一 金ノ器械台 ニケ 金ノ丸形壹ケ

英
 國
 大
 藏
 省
 告
 示
 第
 百

三號舊金銀貨價格表中ニ規定ノ一
分銀一個ニ付一圓銀三十一錢五厘
ノ割合ヲ以テ致換算候方至當ト存
候ニ付本月十五日以降總テ右價格
ヲ以テ換算スルコトニ改正實施可
致候尤モ斯ク一分銀ノ比較ヲ内外
人共同一ナラシメ候上ハ該一分銀
ヲ以テ納稅候義明治七年帝國第九
十三號布告ヲ以テ帝國臣民ニ對シ
差止メ有之候如ク右改正換算法實

施ノ日ヨリ外國人ニ對シテモ之ヲ
差止メ候事ニ致度存候
右回答旁本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ
向ヒ敬意ヲ表シ候敬具
明治二十七年十月九日

外務大臣子爵陸奧宗光

大不列顛特命全權公使

セ、ヲノレーブル、ル、ポール、トレン、ケ閣下

第十七

以書翰致啟上候陳者加奈陀太平洋
 漁船會社所有船エムプレス、オフ、ジヤパン
 等厦門ヲ經テ来リシニ長浦ニ於テ
 檢疫ノ件ニ關シ前後異様ノ取扱ヲ
 受ケタルコト有之候處若シ同會社
 ニ於テ前以テ相當ノ告知ヲ得居候
 ハ、右ノ如キ取扱ノ為メ蒙リタル
 損失等ノ如キハ亦豫メ之ヲ避クル
 コトヲ得ヘキ途モナキニアラサル

英
 國
 大
 使
 官

英
 國
 大
 使
 官

ヘク被存候ニ就テハ如何ナル場所
ヨリ来ル船舶ハ檢疫ノ為メ最終出
帆後九日間ノ經過ヲ要スル義ニ有
之哉貴國汽船會社ハ御告示ノ都合
モ有之候ニ付御通知可致様本月十
日附貴翰ヲ以テ御来意ノ趣致領承
候然ルニ本件ニ就テハ本年五月二
十八日附送第一九號ヲ以テ帝國內
務省告示案相添及御通知置候通り
清國沿海諸港及香港ヲ發シ及同地

ヲ經過シ来ル船舶ニ對シテハ檢疫
ヲ施行スル義ニ有之候尤モ檢疫ノ
上上海等ノ如キ現ニ患者アラサル
地ヨリ来ル船舶ニシテ異状ナキモ
ノハ停留等ノ處分ヲ為サス候得共
香港及廣東最寄ノ地ニシテ患者ノ
有無判然セサル港即チ廈門等ノ如
キヨリ来ルモノハ總テ香港同様取
扱ヒ来リ且ツ是迄同會社所有汽船
ニ對シ檢疫上處置ヲ異ニシタル事

實ハ無之趣ニ有之特ニ廈門港ニ於
テハ「ペスト」患者發生シタル旨本月十
三日發在香港帝國領事ノ電報ニテ
承知致候ニ付従前ノ手續ヲ變スル
コトナク香港同様檢疫ヲ施行スハ
キ義ハ益々必要ニ有之旨其筋ヨリ
申越候間右様御承知相成度此段回
答旁本大臣ハ茲ニ重テ貴下ニ向テ
敬意ヲ表シ候敬具

明治二十七年八月二十日

外務大臣陸奥宗光

大不列顛臨時代理公使

ラルフ、エス、パレエツト貴下

第十八

以書翰致啟上候陳者八月二十九日
 附及同月三十日附貴翰ヲ以テ函館
 二於テ貴國軍艦ニ屬スル六名ノ者
 二對シ陸上ニテ犯罪ノ廉ヲ以テ帝
 國當該官吏ニ於テ之ヲ逮捕訊問シ
 帝國裁判所ニ於テ之ヲ公判ニ附シ
 タル件ニ付貴國政府ノ御訓令ニ依
 リ御抗議相成且貴下ニ於テ右犯罪
 者ハ帝國ノ裁判管轄權下ニ屬スル

英國
 駐日
 公使
 官

英領
 事館
 印

モノニ非ストセラル、理由御來示
相成致閱悉候
本件ニ關スル主要ナル事實ハ既ニ
十分明瞭ナレバ今又之ヲ繰返スノ
必要可無之候得共本問題ノ當否ヲ
查覈スルニ當リ帝國ニ於ケル清國
臣民ニ關スル裁判管轄權ハ帝ニ國
際法上認ムル所ノ原則ニ依リテ之
ヲ有スルノミナラズ條約ノ明文ヲ
以テ帝國司法裁判所ニ屬スルモノ

ナルコト及八月二十二日貴下ヨリ
口頭ニテノ御請求ニ基キ右公判ヲ
幾日間延期シタルコトハ本大臣ニ
於テ茲ニ一言ニ置クヲ適當ト存候
貴下ニハ右六名ノ者ハ士官ノ從者
トシテ貴國軍艦ノ名簿中ニ記入セ
ラレ居ル者ナリトノ故ヲ以テ本件
ニ關シテハ總テノ點ニ於テ貴國臣
民トシテ取扱ハルベキ者ナリトノ
コト隨テ貴國ハ彼等ニ對シ本生貴

國臣民ニ對スルト同様ノ專屬裁判
管轄權ヲ有セララル、者ナリトノコ
トヲ主張セラレ且右ハ永年ノ慣例
上安政五年ノ貴我條約ニ用ヒタル
英國臣民ナル語ニ與ヘラレタル意
義ト齟齬スル所ナレトセラレ尚貴
見ヲ證セラル、為ノ千八百八十四
年ノ貴國內閣宣令並昨年清國ニテ
起リシ一事件ヲ引例相成候
貴下ハ又貴我兩國間ノ現行條約ニ

依リ帝國ハ本件ニ關シ何等ノ裁判
管轄權ヲ有スルモノニ非ズトセ
ラレ且若シ此條約ニシテ存在セズ
隨テ帝國ニ於テ貴國ト並立裁判管
轄權ヲ有スルモノトスルモ帝國カ
本件ニ對シ右並立裁判管轄權ヲ執
行スル權利ヲ拋棄スレハトテ國際
交誼ノ範圍ヲ出ガルヘキ旨御説述
相成候
貴下ニハ又本大臣が前翰中ニ陳述

英國
國
大
使
館

英國
國
大
使
館

シタル貴國が帝國ニ於テ有セラル
、所ノ裁判管轄權ハ貴我兩國ノ條
約ニ基クモノナレハ其明文ヲ以テ
讓與シタル範圍ニ限ラザルヲ得ズ
トノ意見ニ對シ讓與ハ明示ニテモ
默示ニテモ之ヲ為シ得ルモノタル
コトヲ説述セラレ而シテ此意見ヲ
立證スル為メ「エキスチエーレジ」號對「マッス
ド」事件ヲ引例相成候
該事件ニ關シ裁判長「マルシヤル」氏が述

ベラレタル範圍内ニ於テハ一國ハ
默示ニ依リ讓與ヲ為シ得ルノミナ
ラズ反對ノ聲明ナキトキハ實際上
斯ル讓與ヲ為シタルモノト推定シ
テ然ルベキコトハ固ヨリ帝國政府
ニ於テ之ヲ認ムルニ躊躇セサル所
ニ有之候得共本件ト該事件トハ其
間判然タル差異有之候
「エキスチエーレジ」號事件ハ軍艦其物ニ對
スル領土裁判管轄權問題ニ關スル

英
國
海
軍
史
館

英
國
海
軍
史
館

モノニシテ裁判所ノ判決ハ斯ル船
船ニシテ友邦ノ港灣ニ入ルニハ其
國ノ裁判管轄權ヲ免除セラルベキ
黙約存在スルモノナリトイフニ在
リ而シテ此判決タルヤ國際法上認
ムル所ノ原則ニ基據シタルモノナ
ルコトハ明瞭ニ有之然ルニ本件ニ
至テハ外國軍艦乗組員力其軍艦ヲ
離レテ上陸シ土地ノ法律ニ違反シ
タルモノニ有之候

本件ノ如キ場合ニ於ケル軍艦乗組
員ヲ其ノ犯罪ヤシ國ノ裁判所ニテ
之ヲ裁判スルコトヲ得ルハ近世國
際法學者カ斯ル事項ニ關シテノ所
説ニ有之候ハ斯ル場合ニ於テ斯
ル裁判所ノ管轄ヲ免ルコトハ全
ク例外ニ有之候是故ニ帝國政府ノ
所見ニシテハ本件ノ場合ニ於テハ「エキ
スチエーレ」號事件ニ於ケルガ如ク領土
裁判管轄權ノ免除ハ黙示ノ讓與ナ

リト推定スルコトヲ得サルノミナ
ラズ之ニ反シ帝國ニ於テ裁判管轄
權ヲ保留スルモノナリト推定スル
コトヲ得ベキ義ニ有之ト存候
帝國カ條約ヲ以テ貴國ニ讓與シタ
ル裁判管轄權ノ範圍ニ付テハ下文
ニ陳述可致候ハ共本大臣カ今茲ニ
特ニ貴下ノ御明解ヲ乞置度コトハ
帝國ハ條約ノ明文又ハ國際法上認
ムル所ノ必要ニ依ルノ外未ダ曾テ

英
國
大
使
館

其固有ノ裁判管轄權ノ一部ガモ抛
棄シタルコト無之一事ニ候
將又國際交誼ノ問題ニ至テハ若シ
貴我兩國ニ於テ並立裁判管轄權ヲ
有スルモノトセハ帝國政府ニ於テ
其主權ノ作用ニ依リ本件ニ關スル
裁判管轄權ヲ拋棄スルコトヲ得ベ
キハ御所見ノ通ニ可有之候得共國
際上ノ交誼又慣例ニ依リ帝國政府
ニ於テ斯ル拋棄ヲナサバカラ

英
國
大
使
館

所見トノトハヲノ
誤リナラシ

ガルモノナリヤ否ノ點ニ至テハ本
大臣ハ乍遺憾貴下ト所見ト異ニシ
候本大臣ノ見ル所ヲ以テスレハ邦
國間ニ並立裁判管轄權ノ存在スル
場合ニ於ケル善良ニシテ普通ナル
慣例ハ最初ニ該權ヲ執行シタル國
ノ專屬ニ歸セシムルモノニ有之候
然ルニ貴下ガ主トシテ提示セラレ
、重ナル論點ハ彼等ハ其服務ノ性
質上貴國ノ裁判管轄權下ニ屬スベ

キモノナリトノ點ニ有之候様被存
候ニ付帝國政府ニ於テハ此點ニ關
スル貴下ヨリノ御陳述ニ對シ篤ト
考慮ヲ加候得共安政五年ノ條約第
五條第二項ニ英國臣民トアルハ英
國臣民ニ許與スルト同時ニ英國臣
民ノミニ制限セシモノニシテ即チ
實際ノ國籍ヲ以テ帝國ニ於ケル貴
國裁判管轄權ノ標準トセシモノヲ
ルコトハ固ク信ジテ疑ハガル所ニ

英
國
大
使
館

有之候

本大臣ハ前勅中ニ條約ヲ施行スル
為メ制定セラレタル貴國法令ガ條
約ト適合スルコトヲ証スル為メ千
八百六十五年及千八百八十一年ノ
貴國內閣宣令ヲ引用致候ヘ凡之ニ
因テ帝國ニ於ケル貴國ノ裁判管轄
權ハ如何ナル度合ニ於テモ貴國ノ
法令ニ依リテ成立又ハ擴充セラレ
ベキモノナリト陳述セシ次第ニハ

無之候條約締結後二十五年餘ヲ經
テ制定セラレタル所ノ千八百八十
四年ノ貴國內閣宣令ニシテ條約中
明ラカナル語ヲ以テ平易明晰ニ記
載シタル範圍以外ニ貴國ノ裁判管
轄權ヲ擴充スルノ効力ヲ有スルモ
ノトスルトキハ國內法ヲ以テ條約
ノ規定ヲ變更シ又ハ之ニ超越スル
コトヲ得ベキコトヲ承認スルモノ
ニシテ斯ル承認ハ貴國政府ノ發議

ニ依リ成立ニ至リタル國際公法ノ
一原則即チ夫ノ有名ナル千八百七
十一年一月十七日ノ倫敦宣言ノ主
義ニ違背スルニ至ルベシト存候
國際規約ノ效力ハ國內法ノ上ニ位
スルモノナリトノ貴國ノ御持論ハ
世人ノ徧ク知ル所ニシテ今更之ヲ
舉証スルノ必要モ無之候得共千八
百七十五年二月十日上海ニ在ル貴
國ノ支那日本高等法院長ノ下シタ

英
國
大
臣
館

ル判決ハ最モ善ク本件ニ對シ帝國
政府ガ主張スル所ノ論點ニ適合ス
ルヲ以テ本大臣ハ今茲ニ少シク之
ヲ引用シテ貴下ノ高覽ヲ煩ハシ度候
其事件タルヤ貴國漁船「クワシタ」號
ト清國船「クイツアイフア」號トノ衝突ヨ
リ起リタルモノニシテ其争點ハ清
國ニ於ケル清國臣民ハ千八百六十
五年ノ貴國內閣宣令第三條ニ「外國
人ニ關スル本令ノ規定ハ之ヲ清國

英
國
大
臣
館

皇帝ノ臣民ニ適用スルコトアルニ依リ
清國ニ於ケル貴國ノ裁判管轄權上
之ト外國人ト同一視スルコトヲ得
ルヤ否ノ義ニ有之候處、^リガリ、エトモントホル
^ル氏ハ該事件ヲ判決スルニ左ノ如
ク陳述セラレ候

本職ハ該規定(千八百六十五年ノ
内閣宣令第三條)ニ依リ彼等(清國
臣民)ヲ其意思如何ニ拘ハラズ外
國人ト同一ノ地位ニ置クベキモ

ノト思惟スルコトヲ得ス何トナ
レバ英國皇帝ハ彼等ヲ此ノ如キ
地位ニ置クベキ權能ヲ有シ居ラ
ズ彼等ノ地位ヲ定ムルモノハ
英國皇帝カ清國ト締結セラレタ
ル條約ニ在テ存ス而シテ彼等ト
英國臣民トノ間ニ爭議ヲ生ジタ
ルトキハ彼等及領事ハ須ラク條
約ニ是レ依ルベシ英國皇帝ハ國
内法ヲ以テ條約ノ如キ對手間ニ

成立スル所ノ國際規約ヲ變更ス
ルコト能ハズ英國皇帝ハ清國主
權者ト締結セシ該條約ニ依リテ
總テノ爭議事件ハ領事ト清國當
該官吏トノ裁定ニ付スベキコト
ヲ約セラレ實際此等ノ爭議ヲ裁
定スベキ裁判所ハ該條約ニ依リ
テ創定セラレ居レリ若シ英國皇
帝陛下ニシテ內閣宣令ヲ以テ之
ヲ變更セララル、トスルモ清國皇

帝ハ斯ル變更ニ對シテハ其對手
者ニ非サルヲ以テ英國皇帝ハ其
權能以外ニ超越セラレタルモノ
ニシテ內閣宣令中ノ該規定ハ權
限外ノモノトシテ全然無効ナリ
トス
又貴下ガ御引用相成タル「エキステーション」
號事件ノ判決ニ於テモ裁判長「マルシ
ヤル」氏ニハ殆レド右ト同様ノ陳述
有之候

國家カ其領土内ニ於テ有スル所
ノ裁判管轄權ハ當然專屬絶對的
ノモノニシテ其ノ自ラ加ヘタル
制限ノ外他ニ何等ノ制限ヲモ受
クルコトナシ若シ外部ヨリ該權
ニ制限ヲ受クルコトアルトキハ
其制限ノ範圍丈其國ノ主權ヲ減
少シテ以テ之ヲ其制限ヲ加フル
所ノ國ニ授クルモノナリ
是故ニ國家カ其領土内ニ於テ有

スル所ノ完全ナル權カニ對スル
總テノ例外ハ必ズ其國ノ同意ニ
基クモノナルコトヲ要シ此正當
ナル根源ヨリ外決シテ他ノ根源
ヨリ起ルヘキモノニ非ス
以上ノ推論ニ對シテハ復他ニ異見
アルベシトモ信ゼラレ不申而シテ
若シ此論旨ニシテ正當ナル以上ハ
貴國政府ニ於テ單ニ其内閣宣令ヲ
以テ貴國臣民以外ノ者ヲ日本帝國

内ニ於テ貴國臣民ト同一ノ地位ニ
置クバキ旨ヲ宣言セラレ、トモ帝
國政府ハ斯ル宣言ニ對スル對手者
ニ非カレバ之ニ依リテ帝國固有ノ
裁判管轄權ノ一部ヲ殺ル、コトヲ
得ヘキ義ニ無之候

尤亦大臣ニ於テハ千八百八十四年
ノ貴國內閣宣令ハ日本帝國ガ保留
スル所ノ裁判管轄權ヲ殺テ以テ貴
國ノ權能ヲ擴充セラレタルモノト

モ思考難致即チ貴下ガ引用セラレ
レ該宣令中ノ部分ニ對シ條約盟約
讓與慣行認許又ハ其他適法ノ方法
ニ依ルニ限り英國皇帝陛下ハ日本
ニ於ケル此等ノ人ニ關シ裁判管轄
權ヲ有セラレトノ制限ヲ附シ居ラ
ル、ニ依テモ之ヲ知ルコトヲ得ベ
シト存候
思フニ千八百八十四年ノ貴國內閣
宣令中ニ在ル被保護者ニ關スル規

定ノ實際ノ目的ハ必ず日本ニ在ル
貴國裁判所ニ附與スルニ帝國ヨリ
許サレタル範圍内ニ於テ此等ノ者
ニ對シ裁判管轄權ヲ執行スルノ權
限ヲ以テシタルモノニ可有之候
前ニ己ニ陳述セシ如ク貴我條約中
ノ語ヲ按スルニ帝國ニ於テ貴國ニ
對シ條約盟約又ハ讓與ニ依リ帝國
内ニ於ケル貴國臣民以外ノ者ニ對
シ其裁判管轄權ヲ執行スルコトヲ

英
國
大
臣
館

許與シタルコト無之ハ明瞭ナレバ
今一ツ考究スベキコトハ帝國ニ於
テ慣行又ハ認許ニ依リ貴國カ條約
規定セシ範圍以外ニ其裁判管轄權
ヲ擴充セラル、コトヲ許與セシコ
トアリヤ否ノ一事ニ有之候
今假リニ貴下カ主張セラル、裁判
管轄權カ慣例ニ依リ條約以外ニ擴
充セラルベキモノトスルモ其權利
ヲ確定スル為メニハ右ノ慣行及認

英
國
大
臣
館

許ハ少クモ絶ヘズ繼續セラレ且右
習慣的權利ニ對抗スベキ國ニ於テ
十分之ヲ承知シ默認シ居ルコトヲ
要スル義ニ有之候
帝國政府ハ船籍所属國ニ對シテモ
又犯罪者所属國ニ對シテモ共ニ裁
判管轄權ヲ有セザル混合事件ニ付
テハ之ニ關スル裁判管轄權ノ到底
帝國裁判所ニ屬セザルコトヲ了知
スルヲ以テ直接關係諸國ノ權利ヲ

認メ帝國ニ於テ之ニ干涉セズ右等
關係諸國が各自ニ其ノ或ハ船籍所
屬國或ハ犯罪者所属國ノ當該官吏
ニ於テ之ヲ管轄スヘキヤヲ決定ス
ルニ任カセ居候而シテ本大臣が茲
ニ一言致置度ハ清國が帝國ニ於テ
有セシ裁判管轄權ハ前回ノ戰爭ニ
依テ始テ消滅致候一事ニ候
右ノ如キ混合事件ヲ除クノ外帝國
ニ在ル貴國裁判所カ帝國陸上ノ犯

罪ニ付キ貴國臣民以外ノ者ニ對シ
裁判管轄權ヲ執行セラレタル場合
アルコトハ本大臣ノ識認セザル所
ニ有之候

若又貴國領事ガ或場合ニ於テ貴國
船舶ニ乗組居ル貴國臣民ニ非サル
船員ニ對スル告訴ヲ受理セラレタ
ルコトアリトスルモ左ニ記載スル
事件ニ依テ之ヲ觀レハ其實行ノ決
シテ永遠ニ繼續シタルモノニ非サ

ルコトヲ證スルニ足ルベク候

明治十三年中在神戸貴國領事ハ貴
國船舶「クロスフォルド」號ノ乗組員ニ對
シ其ノ陸上ニ於ケル犯罪ニ付キ提
起セラレタル告訴ヲ受理スルコト
ヲ拒絕セラレ其理由トセララル、所
ハ被告人ハ白耳義國臣民ナルヲ以
テ英國ノ裁判管轄權ニ服従スヘキ
者ニ非スト云フニ有之候又明治十
七年中在橫濱貴國領事ハ貴國船舶

純
翻
本
館

ポリ子^リヤ^レ號ノ乗組員タル佛國人民
ヲ服務規律違反ノ廉ヲ以テ處罰シ
而シテ之ト同時ニ服務規律以外ノ
犯罪ニ關シ同人ヲ裁判スルコトヲ
拒絶セラレ候其拒絶ノ理由ハ矢張
同人ハ英國臣民ニ非ストイフニ有
之候而シテ茲ニ殊ニ注意スベキ事
實ハ此事件ガ千八百八十四年ノ貴
國內閣宣令施行以後ニ起リタルコ
トニ有之候

前記ノ事件ヨリ推論スルコトヲ得
ベキ所ノ條約ニ基キタル裁判管轄
權問題ヲ決スルニハ其人ノ雇用セ
ラル、所ヨリモ其人ノ國籍ヲ重シ
トストノ原則ニ遵ヒ貴國ハ屢ニ外
國船舶ノ名簿ニ記入セラレタル貴
國臣民ニ對シ彼等ガ帝國陸上若ク
ハ帝國領海内ニ在ル船舶中ニテ犯
シタル罪科ニ付其裁判管轄權ヲ實
行セラレタルコト有之候

明治十三年中ニ起リシ「ロース」事件ノ
如キハ其一例ニ有之候而シテ特ニ
茲ニ叙述スルニ足ルベキコトハ貴
國政府ハ二年後ニ至リ右「ロース」ハ合
衆國船舶ノ乗組員タリト雖モ貴國
臣民タルコトヲ失ハストノ理由ニ
依リ貴國ハ更ニ抗議ヲ重子彼ニ對
シ裁判管轄權ヲ有セラル、コトヲ
再應主張セラレ以テ合衆國トノ交
渉ヲ了セラレ候

然リ而シテ帝國政府カ最モ重ヲ措
ク所ノ事件ハ明治七年中横濱ニ於
テ起リシモノニシテ本件ト頗ル相
似タル所有之候即チ當時合衆國軍
艦ノ乗組員タリシ貴國臣民「ピーター」、
「フクフレドリル」ナル者ノ陸上ニテノ犯
罪ニ對シ在神奈川貴國裁判所ニ於
テ審理處罰セラレタルコト有之其
節合衆國當該官吏ハ其裁判管轄權
ヲ拋棄シタル次第ニ候ヘ共貴國カ

帝國ニ於テ有セララル、所ノ裁判管轄
權ハ條約ニ基キ且之ニ依リテ制限
セラレ居ルモノニ候ハバ假令斯ル
拋棄者アレバトテ貴國裁判所ニ於
テ右ノ如キ拋棄者ナキトキハ貴國
ニ屬スルモノニ非サル所ノ裁判管
轄權ヲ獲得セラルベキ結果ヲ生ズ
ルモノナリト御主張可相成筈ハ無
之ト存候

前記ノ事件ハ千島「ラウエナ」號衝突事

件ノ終審判決ニ於ケルガ如ク貴國
カ帝國ニ於テ執行セラレ得ヘキ裁
判管轄權ハ總テ條約ニ基カガルベ
カラズトイフ所論ヲ十分支撐スル
ニ足ルバク候又之ト同様ノ原則ハ
明治十年中在神奈川貴國裁判所ニ
テ審理セラレタル英國皇帝對「エリガ
ベス、スカトフ井ルド」事件ニ於テモ認
メラレ
居候然シナガラ今假リニ帝國ニ在
ル貴國裁判所ニシテ慣行又ハ認許

ニ依リ實際條約ヲ以テ讓與セシ範圍以外ノ裁判管轄權ヲ執行シ居ラレタリトスルモ其執行ヲ繼續セラハ資格ノ存否ハ一ニ帝國政府力之ニ對スル同意ヲ繼續スルト否トニ是レ關カリ候義ニ有之候ハ恰モ本件ニ於ケルガ如ク帝國政府ヨリ之ニ反對ノ意思ヲ表明スルニ於テハ直テニ其ノ繼續力ヲ絶テ以テ貴國カ裁判管轄ヲ執行セラレシ能力

ヲ失フニ至ルベク候

貴下カ引照セラレタル昨年清國ニ於テ起リタル事件ニ至テハ本大臣ハ之ヲ以テ帝國政府ニ對シ先例ノ效果ヲ生ズベキモノト思考難致候第一清國ハ自國ノ裁判管轄上ノ權利ニ付テハ頗ル放任疎慢ニ有之第二ニハ貴下ガ貴國軍艦ニ雇用セラハ帝國臣民ニ關シ垂示セラレシ主義ヲ右ノ清國ニ起リシ事件ニ

適用スルトキハ清國ニシテ其臣民
ニ對スル裁判管轄權ヲ拋棄スル姿
ニテ彼等ガ軍艦ニ雇用セララル、コ
トニ同意スルニ非ザル以上ハ清國
ニ於テ彼場合ニ於テ裁判管轄權ヲ
執行スルコトヲ得ベキモノト認メ
居ラル、カ如ク相見ヘ候果シテ然
ラバ貴國裁判所ニ於テ裁判管轄權
ヲ實際執行セララル、コトハ一ノ特
別ナル合意ノ結果ニ屬シ右事件ヲ

以テ何等ノ先例トスルコトヲ得ガ
ルハ固ヨリ論ヲ待タサル次第ニ有
之候之ヲ要スルニ帝國政府ニ於テ
ハ此他尚當然ノ理由ニ依リ清國ニ
於テ起リタル事件就中司法上ニ關
スル事件ノ如キハ之ヲ帝國ニ引例
適用スヘキモノト信ジ居リ不申而
シテ右ノ理由ニ至テハ今更本大臣
ノ喋々ヲ待タズ貴下ノ諒悉セララル
、所ナルベシト相信居候

英
國
大
使
館

英
國
大
使
館

此ノ如ク本問題ニ付何レノ點ヨリ
觀察致候トモ函館ニ在ル帝國裁判
所ニ於テ本件ニ關シ裁判管轄權ヲ
執行シタル義ハ適當ナル次第ニ有
之候
日本國皇帝陛下ノ政府ハ貴我兩國
間ニ増進スルコトヲ努ムル所ノ敬
愛輯睦ノ情誼ヲ顧ミルニ切ナルヲ
以テ一ニ的確ナル權利ト正義トノ
原則ニ遵由スルニ於テハ本件ノ爭

點ヲ解決スルニ難カラズト致思考
候カ故ニ本大臣ハ敢テ胸襟ヲ披ヒ
テ帝國政府ガ本件ノ措置ヲ支護ス
ル主要ノ理由ヲ醜續陳言致候而シ
テ若シ幸ニ本爭議ニ關スル起點ニ
付雙方一致ヲ見ルニ至ルトキハ貴
我同一ノ希望ヲ達スル為メ與カリ
テカアルコト少カラザルベシト存
候御來翰中本問題ハ貴國カ裁判管
轄權ヲ有セラル、ヤ否ヤノ點ニ非

スレテ帝國モ亦裁判管轄權ヲ有ス
ルヤ否ノ點ニ有之旨御垂示ニ候處
帝國ノ裁判管轄權ハ總テ原ト帝國
ニ屬スルモノナルガ故ニ外國カ帝
國ニ於テ執行スルコトヲ得ベキ裁
判管轄權ノ度合ハ實際帝國ニ於テ
為シタル之ガ讓與ノ限度ニ依ラサ
ルヲ得ザル義ニ有之候ハ本大臣
ヲ以テ之ヲ觀ルトキハ本件ニ關ス
ル真ノ問題ハ帝國カ裁判管轄權ヲ

有スルヤ否ノ點ニ非ズレテ帝國カ
讓與ヲ為サル以上ハ當然自國ニ
保有シ居ルベキ所ノ裁判管轄權ヲ
果シテ貴國ニ讓與セシコトアルヤ
否ノ點ニ可有之ト存候
右御回答旁本大臣ハ茲ニ重テ貴下
ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具
明治三十年十月二十二日

外務大臣伯爵大隈重信

大不列顛臨時代理公使

ゼラルド、ラウガー、貴下

第十九

客歲十一月廿二日附第七十七号貴
 簡落手致披見候陳ハ長崎港在留貴
 國僧官エチモンドレル氏借用ノ地所へ接
 近シ道路トノ間ニ介マリ居候狹キ
 一小區ノ地所ヲ貴簡ニ該地所ハ長ク三十三マルド廣ク
 五マルドトアレハ長三十一間幅五間ニシ
テ坪數百五十五坪
 ノ地所ナリ右借用地へ組込借入度旨
 全氏貴國領事代理ホール氏へ願出候
 趣全氏ヨリ貴下へ申出候旨縷々御
 申越、趣致領承候右ハ御来意ノ如

英國大使館

ク既ニ全縣ヨリノ伺出モ有之且小
狭ノ地所ニ付組込候方居留地ノ境
界致判然可然候得氏元來全港居留
地ノ義ハ當時官民混同ノ地ヲシテ
居留地ニ充テシモノニ候得ハ外開
港場函館港居留地トハ事異リ當初賃
借上競元代金取立等ノ取極メ無之
ニ付借地外國人ニ於テ該地不用ノ
節ハ讓受人無之氏直ニ地方官へ返
附スル事容易ナルヨリ従前全居留

地内ニ許多ノ明地ヲ生シ目下二萬
八千餘坪ニ至リ空シク荒蕪ノ地ト
相成居為夫所有主ニ於テ八年々一
錢ノ地料ヲ領收セサルモ公租ハ致
收納候故困難ヲ究メ候事情モ有之
旁今回借地願出ノ地所モ他日前全
様ノ影響ヲ蒙ルヘクト存シラレ候
右ハ卑竟前条返地後ノ方法未定ヨ
リ徒ニ明地ヲ増加スルニ相當リ候
因テ從來難渋ノ返地明地處今ノ方

畢、誤リナラン

法ヲ全港地所規則書第十二條ニ基
キ今後同縣令ト各國領事トノ間ニ
於テ公平ニ談決為致候上該方法ニ
據リ今回御請求ノ地所モ貸渡候様
為致度候ニ付此旨御協議旁申進候
条貴下御意見ノ趣旨御申越有之度
此段回答得貴意候敬具

外務卿代理

明治十七年二月十四日

參議伊藤博文

大不列顛國代理公使

ゼオクレイブル、バウル、ヘンリー、ル、ポエルトレンチ貴下

第 二 十

以書翰致啟上候陳者本月二日附書
 翰ヲ以テ帝國政府ニ於テハ穀類及
 貨幣ヲ戰時禁制品トセララル、ヤ且
 ツ此等ノ物品ハ何等ノ船舶ニアル
 モ捕獲セラルヘキヤノ義貴國臨時
 代理公使ラルスパジエツト貴下ヨリ御問
 合ノ趣致領承候右第一問ニ對シテ
 ハ直チニ判然タル御回答致兼候ノ
 ミナラス右御問合ハ果シテ何等ノ

英
 國
 大
 使
 館

英
 國
 大
 使
 館

場合ニ關スル事ニヤ實際ノ事情ニ
付尚一層精細ノ御報道無之候テハ
本大臣ニ於テ帝國政府ノ權義ヲ保
全スルト同時ニ質問者ニ満足ヲ與
フル所ノ御回答ニ及兼候尤將來實
際差起ルヘキ場合ニ對シテハ帝國
政府ハ國際法ノ最モ開明寛大ナル
主義ト相認候所ニ基キ其處分ヲ施
サレトスルハ本大臣ノ敢テ確信ス
ル所ニ有之候

貴問第二即チ戰時禁制品ノ性質ア
ル物品ハ何等ノ船舶ニ積載スルモ
捕獲セララルヘキヤ否ノ件ニ關シテ
ハ單ニ其船舶ノ國籍如何ニ依リ積
載物品ノ捕獲及没收ヲ防止スルノ
理由トナスコト能ハスト相信候右
回答旁本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向
テ敬意ヲ表シ候敬具

明治二十七年八月二十三日

外務大臣陸奥宗光

英
國
大
使
館

大不列顛時命全權公使

セ、ヲノレーブル、ル、ポールトレンケ閣下

第廿一

以書翰致啟上候陳者昨年十二月四日韓國平安道熙川ニ於テ貴國鑛山技師「ワイゴール」氏夫妻一行ト全地ヲ守備セル我兵員トノ間ニ生シタル行違ニ關シ同月廿八日本年一月八日并同月三十日附貴翰ヲ以テ縷々御照會之趣致敬承候右ハ直ニ其筋へ及移牒置候処今般在韓陸軍當局ノ報告ヲ具シ其筋ヨリ回答有之候所

英
國
大
使
館

ニヨレハ北韓地方ハ當時尚ホ軍事
占領ノ状態ニアリタル處其頃恰モ
軍事探偵ノ嫌疑アル外人數名韓國
内ヲ徘徊致居候折柄ニテ我軍ニ於
テハ彼等ノ來往ニ關シ注意ヲ加フ
ヘキ旨一般部下ニ對シ訓令ヲ下シ
居リタル際熙川守備隊長タル特務
曹長鈴木政次郎ハ客歲十二月四日
熙川江界間ノ道路ニ於テ外國人ノ
一行旅行シツ、アリテ全日熙川ニ

宿泊セントスルコトヲ聞キ軍曹ヲ
派遣シテ其國籍氏名行先等ヲ聞取
ラシメタルニ外人ハ且ツ笑ヒ且ツ
語り或ハ旅行券ヲ有セスト答へ或
ハ年齢ヲ八十四歳ト稱シ其住所ハ
「ロントン、バツキングム、パレースト」ト唱ヘ言語擧
動頗ル嘲弄的態度ニ出テ江界ニ向
テ出發スル旨復命セルニ付更ニ軍
曹ヲシテ一行ノ呼戻ヲ命シタルニ
軍曹ハ一行ノ銃器ヲ携帶セルニ鑑

ミ衛兵三名ニ着劍セシメ追躡スル
コト約一里ニシテ漸ク追付キ再三
呼止メタルモ立止マラサルヲ以テ
一行中最後ニ在リシ米國人「テロー」ノ
面前ニ到リ構銃ヲ為シテ停止セシ
メ英國人夫妻ト共ニ瀬川ニ連レ歸
リ同地ニ於テ尋問ノ上漸ク其國籍
姓名職業行先等ヲ詳ニシ且ツ旅行
券所持ノコトヲモ承知シタリトノ
コトニ有之右ニ付在京城我軍司令

官ハ英國代理公使第一回ノ照會ヲ
林公使ヨリ移牒セラレタルニ付當
時未タ當該官憲ノ詳報ニ接セズ事
ノ真相ヲ明ニセサリシモ取急キ林
公使ヲ介シテ如此事件ヲ生シタル
ヲ深ク遺憾トシ事實ヲ取調フヘキ
ハ勿論ナルモ先以テ我兵卒ノ用意
ノ到ラサリシコトアルヘキヲ疑ハ
サル旨ヲ述ヘ不取敢陳謝ノ意ヲ表
スル旨通知セシカ後ニ至リ前記ノ

事實明カトナリタルニヨリ第十五
師團長ニ命シ瀬川守備隊長特務曹
長鈴木政次郎ハ輕謹慎五日軍曹以
下ハ輕營倉三日ニ處シタリ
大要以上ノ如ク回答有之今回ノ出
來事ニ關シテハ本大臣ニ於テモ深
ク遺憾トスル所ニ有之候得共我陸
軍當局ニ於テモ亦本件ノ措置ニ對
シテハ十分ノ注意ヲ拂ヒ慎重ナル
審理ノ結果以上ノ如ク夫々處分ヲ

了シ且將來再ヒ同様ノ不都合ナキ
様篤ト部下ヲ訓戒シタル次第ニ有
之候ニ付テハ本件ハ是ニテ終了シ
タルモト御認相成度此段回答旁
本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意
ヲ表シ候敬具

明治三十九年三月十三日 外務大臣侯爵西園寺公望

大不列顛特命全權大使

サ、クロード、マックスウェル、マクドナルド閣下

裁 決 書

愛知縣知多郡乙川村廿番戸平民

被審人 間瀬惣太郎

兵庫縣神戸市楠町七丁目十一番

二十番平民

被審人 曾良鉉三郎

右者ニ對スル汽船金城丸英國汽船
ハラロシケ號ト衝突ノ件ニ関シ審理ヲ
遂クル處

被審人間瀬惣太郎ハ甲種船長ノ海

英國大使館

英國大使館

技免状ヲ受有シ尾張國龜崎町ニ船籍港ヲ定ムル井口半兵衛所有汽船總噸數二千三十八噸ヲ有スル金城丸ニ船長トシテ乗組執職中又被審人曾良鉉三郎ハ内海水先區水先免状ヲ受有シ英國倫敦ニ船籍港ヲ定ムルハックノール汽船會社所有汽船總噸數四千百九十二噸ヲ有スルハラロケ號ニ水先人トシテ乗組其業務ニ從事中金城丸ハ軍人軍夫等百五拾四

人及軍馬六頭ヲ搭載シ明治三十八年八月廿二日午後五時三十四分（ハラロケ號ノ時計ニ換算ス以下同じ）安藝國宇品ニ向ケ豊前國門司港ヲ發シ同六時十九分部埼燈臺ヲ南西二分ノ一南磁針方位以下同じ距離二分ノ一海里ニ測定シ針路ヲ南東二分ノ一東ニ定メ同七時四十六分本山浮標ヲ北東微東四分ノ三東距離ニ海里ニ測定シ姫島燈台ヲ約二海

里半ノ距離ニ並航スル目的ニテ針
路ヲ南七十三度東ニ轉ス當時天候
ハ少雨風ハ南東ノ至微風ニシテ緩
漫ナル順潮ニ乘シ一時間約九海里
四分ノ一ノ実速力ヲ以テ航行セリ
是ヨリ先被審人物太郎ハ門司出港
後絶ヘズ船橋ニ在リテ本船ノ運航
ヲ指揮シタルモ同七時四十九分海
図ニ就キ針路ヲ對照スル為メ船橋
ヲ降リ同八時ヨリ一等運轉七龜田

長吉ノ當直トナリタルニヨリ再ヒ
船橋ニ昇リ指定ノ針路ヲ點檢シ同
人ニ對シ針路ヲ右方ニ偏セシメサ
ル様注意ヲ加ヘテ船橋ヲ降リ其直
下ニ在ル海図室ニ入テ字品碇泊場
司令部へ提出スヘキ報告書類ノ調
製ニ従事シ同十時頃本船ハ姐島燈
臺ヲ將ニ四點方位ニ測ラントスル
位置ニ達シタリト思惟シ再ヒ船橋
ニ昇リタルニ未夕其位置ニ達セス

且ツ本船ハ先ニ當直運轉士ニ其ハ
タル操舵上ノ注意ト潮流トノ影響
ニ依リ針路ヨリ約半海里左方へ偏
倚セルコトヲ察見シ同時ニ左舷船
首半點三海里以上ノ距離ニ白燈一
個及同舷正横後一二點一海里以内
ノ距離ニ白燈二個及綠燈ヲ認め運
轉士ニ船首ノ燈火ヲ訊ホタルニ其
ハ本船ヲ追越レタル汽船ノ船尾燈
ナリト答へ且ツ本船門司出港ノ際

大形汽船一艘本船ニ踵テ出港シ夕
ルヲ認めタルヲ以テ同船ノ燈火ナ
ルヘシト推惟レ何レモ危険ヲキヲ
以テ其儘船橋ヲ降り海図室ニ於テ
針路ヲ換案中同時十五分頃本船ノ
汽笛短声一発ヲ聞キ直ニ船橋ニ昇
ル際適々ハテロシク號ニ於テ機関
後退ヲ為ス為メ汽笛短声ヲ三発シ
タルニ被審人惣太郎ハ咄嗟ノ際之
ヲ短声二発ノ左轉信號ト聞キ同時

二左舷船首約一轉三鏈許ノ距離ニ
誤船ノ白燈二個及綠燈ヲ認メ當直
運轉士ヨリ本船ハ最初他船ト紅燈
ヲ相對シ航過スル場合ナリシニ他
船ハ綠燈ヲ現ハシ其船首ヲ危險ナ
ル方向ニ變轉シタルヲ以テ汽笛短
声ヲ一発シ舵柄ヲ左舷一杯ニ偏シ
タリト聞キ且ツ他船ハ先ニ汽笛二
声ヲ発シタルヲ以テ船首左轉ヲ繼
續スルモノト思惟シ本船ハ依然右

轉ヲ繼續シテ互ニ左右ニ迴避セシ
ト企図シタルニ兩船相接近シ危險
切迫セシニヨリ機関ノ運轉ヲ停止
シ踵テ後退ヲ為サントシタル刹那
左舷船首約三点ニ方リ他船ノ兩舷
燈ヲ認ムルニ至リ到底衝突ノ免レ
サルヲ認知シ損傷ヲ輕微ナラシメ
シカ為メ全速力前進及舵柄右舷一
杯ヲ令シ他船ノ船首ヲ通過セシト
シタルニ其效ナク又バラロレグ穉

ハ雜貨約二千五百噸ヲ搭載シ明治
三十八年八月二十二日午前六時豊
前國門司港へ向ケ振津國神戸港ヲ
発シ航行ノ途被審人曾良鉉三郎ハ
絶ヘス艀橋ニ在リテ本艀ノ運航ヲ
指揮シ同日午後七時五十五分周防
國屋島平根埼ヲ北微西二分ノ一西
距離一海里ニ測リ針路ヲ西微北ニ
定メ同八時四十分頃同國宇和島ヲ
右艀正横約一海里ニ並ヒ姫島燈臺

ヲ約ニ海里半ノ距離ニ並航スル目
的ニテ針路ヲ西微北四分ノ三北ニ
轉シ同十時前被審人鉉三郎ハ三等
運轉士アラレ、バウドレ、クーツヲシテ同燈
台ノ四點方位ヲ測定セシムル際本
艀左艀艀首約半點半海里許ノ距離
ニ一帆艀ノ綠燈ヲ認メタルヲ以テ
艀首ヲ左轉シテ其艀尾ヲ通過シ原
針路ニ復シタルニ因リ其測定距離
ニ差違ヲ生シ且ツ潮流ノ為メ左方

へ偏セラレ同十時該燈臺ヲ左舷正
横約二海里四分ノ一ノ距離ニ並航
シ針路ヲ西微北二分ノ一北ニ轉シ
潮流ニ逆ヒ一時間約十海里四分ノ
一ノ実速力ニテ進航シ同時十分頃
右舷船首約三海里ノ距離ニ一汽船
ノ白燈二個及紅燈ヲ認メタルヲ以
テ船首ヲ二三點右轉シテ之ヲ左舷
ニ替ハシタル後原針路ニ復舊セリ
而シテ先ニ船首四點方位ニ依リ測

セハ衍ナルマレ

定シタル同燈臺ノ距離ハ正確ナラ
サルヲ以テ更ニ船尾四點方位ヲ測
定セシメントスル際同時十四分頃
右舷船首約一點半六鏈二分ノ一許
ノ距離ニ方リ金城丸ノ紅燈ヲ認メ
其檣燈ヲ認メサルニヨリ當時ノ風
力ニ照ラシ之ヲ殆ント静止セル左
舷開キノ帆船ナリト思惟シ當時其
船尾ヲ通過スルニ何等支障ナカリ
シモ其前面ヲ航過セセント欲シ其

英
國
海
軍
館

英
國
海
軍
館

儘進行中同時十五分頃該紅燈ノ方
位ヨリ汽笛短声一発ヲ聞キ始メテ
進行中ノ汽船ナルコトヲ覺知シ直
ニ舵柄左舷一杯機関全速力後退ヲ
令シ汽笛短声ヲ三発シ船首約二點
右轉シタルトキ姫島燈臺ヲ距ル約
北西微北二分ノ一北三海里四分ノ
三許ノ所ニ於テハラロシケル船
首金城丸ノ左舷船尾ニシテ船尾接
ト第四艙口トノ中間ニ前方ヨリ約

四十五度ノ角度ヲ以テ衝突セリ于
時同十時十六分頃ニシテ天候ハ粗
雨風ハ南東ノ至微風潮流ハ約四分
ノ一海里ノ東流ナリシスクテ衝突
後ハラロシケル船ハ其突入シタル船
首ヲ金城丸ノ船體ヨリ分離スルト
キハ他船ハ直ニ沈没ノ虞アルヲ以
テ後退ヲ停止シ微速力前進ヲ為シ
居タルニ金城丸ハ船尾ヨリ沈降ヲ
始メ危険ニ瀕セシニ因リ止ムヲ得

海軍省
海軍省
海軍省
海軍省

海軍省
海軍省
海軍省
海軍省

ス再ヒ後退ヲ為シ而船分離スルヤ
金城丸ハ忽チニシテ沈没シバラ口
ング號ハ衝突ノ為メ船首接甲板下
ニ於テ船首材長三十呎許少シク右
舷ハ屈曲シ之ニ隣接スル右舷外板
六枚ニ亘リ大破孔ヲ生シ同左舷外
板五枚ニ數個ノ擦傷其他肋骨及強
材等ニ損傷ヲ生セリ是ヨリ先被審
人物太郎ハ而船衝突スルヤ直ニ総
員ヲ喚起シ端艇ノ降下ヲ令シタル

ニ本船ノ沈没急速ナリシ為メ其效
ヲ奏セズ軍人軍夫及船員等統計ニ
百十人ハ本船ト共ニ海中ニ沈溺シ
タルヲ以テバラ口ング號ハ速ニ端
艇四艘ヲ降下シ僅カニ四十五人ヲ
救助シ得タルモ内石川佐十外二人
ハ負傷シタリ而シテ同船カ神戸出
港後相前後シテ航行シ衝突ノ際ニ
ハ其右舷船尾約四分ノ一點一海里
許ノ距離ニ追蹊シ居タル英國汽船

英國汽船

ポールトマウス號モ衝突後ハラロン
グ號ノ難船信號ヲ認メテ救助ニ来
リ共ニ翌廿三日午前三時頃迄其遭
難地附近ニ漂流スル溺者ノ搜索ニ
従事セタルモ其效ナク島内榮外四
十人ノ溺死者及小堀藤太外百二十
三人ノ行衛不明者ヲ生シタリ又バ
ラロンク號ハ衝突前成規ノ船燈ヲ
表示シ金城丸ハ成規ニ従ヒ船燈ヲ
掲揚シ且ツ衝突前ハラロンク號ニ

英海軍省
海軍省
海軍省
海軍省
海軍省

對シ其播燈及紅燈ヲ表示スル位置
ニ在リタルモ播燈ハ消滅シ紅燈ハ
其光カ十分ナラサリシ為メ約六鐘
半ノ距離ニ達スルマテ同號ニ於テ
之ヲ発見スルコト能ハサリシ事實
ニシテ其證憑ハ汽船ハラロンク號
船長エドワード・テイワシデエンキ
同船三等運轉士アラシ、ハウドレ、
クルツ同船夫ジー、ハルト
グレシ同看守ラガーフォールド
同船水先人
被審人曾良鉉三郎及汽船金城丸船

英海軍省
海軍省
海軍省
海軍省
海軍省

長被審人間瀬惣太郎等ニ對スル地
方海員審判所理事官吉田定康ノ聽
取書而被審人ヨリ神戸海務署ハ提
出シタル海難届書及被審人鉉三郎
並ニハラロシガ弼舩長ナエシキンスヨ
リ同署ハ提出シタル海難報告書及
而被審人ノ前記報告書ニ對スル訂
正届書英國海軍審判所ノ而舩衝突
事件審判一件記録寫神戸區裁判所
ノ本件ニ関スル證據保全事件記録

寫横濱區裁判所ノイデー、ケエシキス及
シー、ゼー、ラッダーニ對スル證據保全調
書寫受命審判官服部寛司ノ囑託ニ
依リ大阪地方海員審判所受託審判
官日高林三郎ノ証人汽舩大札丸舩
長佐藤市郎治同一等運轉士石黒佐
吉同水夫濱田常吉ニ對スル下調々
書受命審判官服部寛司ノ照會ニ係
ル海事官堤正義ノ汽舩佐渡丸舩長
ヘクトル、フレーガー同三等運轉士大塚源

英國大坂海關

吾及砲兵少尉松田市松ニ對スル取
調書同海事官ノ照會ニ對スルフレ
カノ回答書寫証人汽船金城丸倉
庫番竹本善太郎同水夫間瀬直吉同
英國汽船ゴールドマウス船長ホレシヨカ
同三等運轉士チャールズ、ゲエ、ルーター同
水先人アーサー、フヰツシヤ等ニ對スル下
調々書受命審判官服部寛司ノ照會
ニ依リ海事局技手茂木次雄ノ竹本
善太郎ニ對スル取調書金城丸乗客

及船員中死亡者行衛不明者並ニ生
存者ニ関シ當所ノ照會ニ對スル被
審人物惣太郎ノ報告書同上ノ事項ニ
関シ受命審判官服部寛司ノ照會ニ
對スル同被審人及陸軍大臣官房ノ
回答書溺死者死體ニ関シ同官ノ照
會ニ對スル大分山口福岡玉縣知事
ノ回答書神戸海民病院主医ノ間瀬
仙之助石川佐十門畑四郎松ノ負傷
ニ對スル診断書海事官山本幸男ノ

汽船ハラロング號損所臨檢報告書
同船損所見取図並ニ同官ノ同船臨
檢再報告書被審人間瀬惣太郎ヨリ
當所へ提出シタルハラロング號損
所寫真ハラロング號航海日誌及機
関室日誌各寫明治三十八年八月二
十二日ニ於ケル姫島部埼関崎各燈
臺氣象月報寫兩船衝突當時ノ天候
及狀況ニ関シ受命審判官服部寛司
ノ照會ニ對スル姫島燈臺ノ報告書

汽船金城丸特別検査船體部件名書
謄本並ニ兩被審人カ當廷ニ於ケル
供述ニ徴シ十分ナリトス
之ヲ審按スルニ被審人曾良鉉三郎
ハ衝突前金城丸ノ檣燈消滅シ其紅
燈ノ光カ十分ナラサリシ為メ之ヲ
帆船ト誤認スルニ至リタルモノナ
リト虽モ右舷船首ニ接近シテ同船
ノ紅燈ヲ認メ其動静明確ナラスシ
テ衝突ノ虞アリ且ツ當時船尾ヲ通

過スルニ何等支障ナキ場合ナルニ
モ拘ハララス強テ其前面ヲ横切ラレ
トシ遂ニ兩船ノ衝突ヲ惹起シタル
モノニシテ本件ハ主トシテ被審人
鉉三郎カ海上衝突豫防法第二十二
條ノ規定ニ違背シタル不當ノ運航
ニ起因スト虽モ被審人間瀬惣太郎
ニ於テ衝突前數々船橋ニ在リナカ
ラ金城丸ノ船燈前記ノ如キ状態ナ
ルニモ拘ハララス之ヲ覺知セスシテ

航行シ為メニ被審人鉉三郎ヲシテ
之ヲ帆船ト誤認スルニ至ラシメタ
ル職務上ノ懈怠モ亦本件ノ一因ヲ
為スモノニシテ被審人鉉三郎ノ所
為ハ水先法第十九條第一號及第二
號ニ該當スルヲ以テ海員懲戒法第
二條第二號ヲ適用シ又被審人物太
郎ノ所為ハ海員懲戒法第一條第二
號及第三號ニ該當スルヲ以テ同法
第二條第二號ヲ適用シ處分スヘキ

英
國
大
使
館

毛ノトス依テ裁決スルコト左ノ如
シ
被審人間瀬惣太郎受有甲種船長免
状ノ行使ヲ四月停止ス
被審人曾良鉉三郎受有内海水先區
水先免状ノ行使ヲ六月停止ス
審判費用金七拾九圓八拾七匁ノ内
金三拾九圓九拾三匁五厘ハ被審人
間瀬惣太郎ノ負担トシ金三拾九圓
九拾三匁五厘ハ被審人曾良鉉三郎

ノ負担トス

明治三十九年一月二十九日東京地
方海員審判所審判廷ニ於テ言渡ス
地方海員審判所理事官石川武之本
件ニ干與ス

審判長地方海員審判所長梅村貞明

地方海員審判所審判官服部寛司

地方海員審判所審判官中林長國

地方海員審判所書記矢野芳

以書翰致啓上候陳者帝國政府ノ登
 記當該官カ客年勅令第三百二十九
 號ニ關シ永代借地權ハ地上權欄内
 ニ登記スヘキモノニシテ又永代借
 地券ハ右登記後法律上効力ナキニ
 至ルヘシトノ解釋ヲ採ル由御聞込
 相成右解釋ハ日英條約第十八條ニ
 永代借地券ハ有効ノモノト確認セ
 ラルヘシトアル明文ニ違背スルモ

英
 國
 大
 陸
 館

英
 國
 大
 陸
 館

ト思考相成候趣ヲ以テ該勅令ニ
依ル永代借地權ノ登記カ地券ニ及
ホスヘキ効果ハ如何ナルモナ
モノナルヤ假令帝國政府ニシテ前
記ノ解釋ヲ採ラサルトスルモ既ニ
當該官中右ノ如キ解釋ヲ採ル者ア
リトセハ明ニ永代借地券ヲ確認ス
ルノ方法ヲ採ルコト必要ナルヘキ
旨客年九月四日附貴翰ヲ以テ御申
越了承致候帝國政府ハ右勅令ニ依

リ永代借地權ヲ地上權トシテ登記
スルモ條約ニ違背スルモノニ無之
ト存候何トナレハ民法施行法第四
十五條ニ於テ外國人又ハ外國法人
ノ為メニ設定シタル地上權ニハ條
約又ハ命令ニ別段ノ定ナキ場合ニ
限リ民法ノ規定ヲ適用ストノ規定
アルヲ以テ永代借地權即チ外國人
ノ為メニ設定シタル地上權ハ一種
特別ノ地上權ト認メラレタルモノ

ニシテ民法ノ規定ニ依ル地上權ニ
非サル事明了ナルガ故ニ有之候將
又該勅令ニ依リ永代借地權ヲ登記
シタル後ト雖トモ帝國政府ハ右借
地券ハ依然効力ヲ有スヘキモノト
解釋致候乍併右勅令ハ客年十二月
廿七日附勅令第四百五十八號ヲ以
テ別紙官報掲載ノ通改正セラレ即
該勅令中地上權ナル文字ノ下特ニ
括弧内ニ永代借地權ノ文字記入セ

ラレタルニ由リ所謂地上權ハ永代
借地權ナルコト一層判明ニ相成候
又永代借地權ノ移轉アリタルトキ
ハ地券ニ其旨ヲ記載スルニ非レハ
之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ
得サルモノトナシ且従前永代借地
權ノ移轉ニ付キ地券ニ為シタル記
載ハ右勅令ニ依ル記載ト同一ノ効
力ヲ有スルモノトナシ之ニ由テ地
券ノ効力確認セラレタルヲ以テ最

英
國
大
學
官

英
國
大
學
官

早前記ノ如キ疑義ヲ生スルノ餘地
ナキニ至リタルモノト存候因テ右
勅令第四百五十八號掲載ノ官報一
部及御送附候間委細右ニテ御了知
相成度

右御回答旁本大臣ハ茲ニ重テ閣下
ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

明治三十三年一月十五日

外務大臣子爵青木周藏

大不列顛特命全權公使

カー、アーネスト、メーソン、サトウ閣下

第廿四

以書翰致啟上候陳者元外國人居留
地内ニ於テ永代借地券ニ依リ貴國
臣民ガ保持スル所、財産ニ對シ明
治三十二年勅令第三百二十九號及
同年勅令第四百五十八號ノ及ホス
ヘキ法律上ノ効果ニ關シ貴公使館
ヨリ再三御申越ノ次第アリタルモ
帝國政府ニ於テハ未タ之ニ應答ス
ルノ運ヒニ至ラス又帝國政府ニ於

英國大使館

英國大使館

テ右勅令第四百五十八號第一條ノ
指定シタル期限ノ延長ヲ拒絕シタ
ルニ就テハ法律上ニ於ケル右財産
ノ取扱ヲ日英通商航海條約第十八
條ノ旨趣ニ適合セシムルノ目的ヲ
以テ帝國政府ニ於テ速カニ立法手
段ヲ執ラムコトヲ御希望相成候趣
並ニ右期日ノ延長ナカリシ結果ト
シテ損傷セラレ、コトアルヘキ貴
國臣民ノ權利ハ一切貴國政府ノ名

ニ於テ之ヲ留保セラレ又永代借地
權問題ノ満足ナル解決ヲ見ルニ至
ルマテ改正條約實施以前ニ貴國臣
民カ元外國人居留地内ノ地所及家
屋ヲ目的トシテ取得シタル抵當權
及其他ノ權利ハ登記ヲ經サルモ、
ト雖モ其後ニ成立シテ既ニ登記ヲ
經タル同種ノ權利ニ對シ優先權ア
ルヘキコトヲ要求被成候趣本年一
月三日附貴翰ヲ以テ御申越相成致

了承候

勅令第四百五十八號ニ依リ永代借地權ヲ地上權(永代借地權)、名稱ヲ以テ登記スルハ午八百九十四年七月十六日締結ノ日英通商航海條約第十八條ノ趣旨ト相背馳スルモノナリ又該條ノ擔保ハ帝ニ永代借地ノミナラス其地上ニ建設シタル家屋ニモ及フモノナリト貴國政府ニ於テ御主張相成候事ニ就テハ追テ

何分ノ義可及御回答候條左様御承知相成度候

貴國政府ハ勅令第四百五十八號第一條末項ノ期限延長セラレサリシ結果トシテ損傷セラル、コトアルヘキ貴國臣民ノ權利ヲ一切保留セラレ又永代借地權問題ノ解決ニ至ルマテ改正條約實施前ニ元外國人居留地内ノ地所及家屋ヲ目的トシテ設定シタル抵當權及其他ノ權利

ハ假令登記ヲ經サルモ、ト雖、其
後ニ設定シテ登記ヲ為シタル權利
ニ對シ、優先權アルヘキコトヲ閣下
ニ於テ御要求相成候ヘ、モ抑モ永代
借地權ヲ除キ、改正條約實施前ニ外
國人カ不動産ニ關シ、適法ニ取得シ
登記ナクシテ第三者ニ對抗スルコ
トヲ得タル權利ヲシテ、改正條約實
施後一定ノ期間ヲ限リ、其設定順序
ニ依リ優先權ヲ得セシメタルハ畢

竟帝國政府ノ厚意ニ出テタル任意
ノ措置ニ有之帝國政府ハ此特例ヲ
設クルノ義務ヲ條約上負擔シタル
次第ニハ無之候元來舊條約實施ノ
時代ニ於テ不動産ヲ目的トシテ設
定シタル如何ナル權利カ當時之ヲ
支配シタル外國ノ法律ニ依リ登記
ナクシテ第三者ニ對抗スルコトヲ
得タルヤ帝國政府ハ改正條約實施
ノ際ニ於テ其權利ノ實體ヲ詳悉セ

英
國
大
使
館

英
國
大
使
館

サリシト雖氏閣下ノ前任者ヤ、ア子ス
ト、サトウ氏ハ明治三十二年五月一日ヲ
以テ公然トナク前任外務大臣青木
子爵ニ送ラレタル覺書中ニ此種ノ
權利アルコトヲ主張セラレ又是等
ノ權利ヲ正當ニ保有スル者ニシテ
現ニ歐洲ニ滞在スルモノモアルカ
故ニ彼等ヲシテ其權利ヲ保全セシ
ムル為メ充分ナル猶豫期限ヲ與ヘ
ラレ度即チ改正條約實施ノ時ヨリ

一々年以内ニ登記スルニ於テハ之
ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得
ルコトニ帝國ノ法律上規定セラレ
度シトノ希望ヲ述ヘラレタリ依テ
帝國政府ハ萬一ニモ外國人ノ曾テ
正當ニ取得シタル權利ヲ改正條約
ノ實施ニ因リ損傷スルカ如キコト
ナカラシメンコトヲ欲シ、サトウ公使
ノ希望ヲ容レ以テ明治三十二年勅
令第三百二十九號第一條ニ改正條

約實施後一ヶ年ノ期間ヲ設ケ其後
勅令第四百五十八號ヲ以テ同條ヲ
改正スルニ及テ更ニ其期限ヲ客年
十二月三十一日マテ延長シタル次
第二候ヘハ帝國政府カ與ヘタル猶
豫期限ハサトアーネスト、サトウ氏ノ希望セ
ラレタルヨリモ一層長期ニ涉ルモ
ノニ有之而シテ此約一ヶ年半ノ猶
豫期間カ此特例ヲ設ケタル目的ヲ
達スルニ餘アリシコトハ本大臣ノ

信シテ疑ハサル所ニ有之候其他右
勅令ノ指定シタル期日ヲ延長スヘ
キ理由ナキハ客年十二月十日附書
翰ヲ以テ本大臣カ縷々詳述セシ所
ニ依リ御了解相成候事ト存候又貴
國政府ニ於テ該期日ノ延長ナキカ
為メ損傷セラレ、コトアルベシト
ノ杞憂ヲ抱カル、所ノ權利ハ如何
ナル權利ナルヤ閣下ニ於テ未タ之
ヲ指摘セラレタルコトナク本大臣

ニ於テハ斯カル權利アルヘシトハ
思料不致候ヘ氏假リニ之レアリト
スルモ帝國政府ニ於テ該期日ヲ延
長スヘキ理由無之候ニ付之ヲ延長
セサリシ結果トシテ損傷セラレタ
ル權利ニ對シ帝國政府カ何等責任
ヲ執ルヘキ理由ハ無之ト存候將又
本年一月三日ノ貴翰末段ニ於テハ
主トシテ改正條約實施前ニ設定セ
ラレテ未タ登記ヲ經サル抵當權ニ

就キ其優先順序ヲ御要求相成候ヘ
氏千八百八十一年貴國ニ於テ制定
セラレタル清國及日本國ニ關スル
勅令第二十四條ニ依レハ貴國臣民
カ日本國又ハ清國ニ於テ有スル不
動^産ヲ目的トシテ設定シタル抵當權
ハ同條ノ指定シタル期間ニ登記ヲ
為スニアラサレハ其登記以前ニ成
立シタル普通ノ債權ニ對シ優先權
ヲ得ルモノニ無之即チ之ヲ約言ス

レハ改正條約實施以前ニ於テ貴國
臣民ニ係ハル抵當權ヲ支配シタル
貴國ノ法令ニ依レハ登記ヲ為サ、
ル抵當權ハ毫モ優先權ヲ有シタル
コト無之其次第ハ前顯サトウ公使
ノ覺書ニモ掲載有之候然ルニ今ヤ
該抵當權カ帝國法律ノ支配ヲ受ク
ルニ方リ其未タ曾テ有セサリシ所
ノ優先權ヲ享有スヘキモノナリト
御主張相成候ハ本大臣ノ甚タ了解

ニ苦シム所ニ有之候

右回答旁本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ
向テ敬意ヲ表シ候敬具

明治三十四年二月五日

外務大臣加藤高明

大不列顛特命全權公使

サリ、クロード、マックスウエル、マクドナルド

閣下

第廿五

以書翰致啟上候陳者本年四月二十
日附第十三號貴翰ヲ以テ御尋越ノ
貴我新條約、實施以後貴國人カ本
邦内ニ於テ諸種、營業ヲナスコト
ニ關スル取扱手續中内務大臣主管
、分ニ關シテハ已ニ本月十九日附
送第二二號ヲ以テ御通達及置候處
今般農商務大藏兩大臣ヨリ各主管
ノ事務ニ付夫々回答有之候間茲ニ

及御通達候

一新條約實施前ニ日本ニ於テ本店
 又ハ支店ヲ設立シ銀行事業ヲ營
 ミタル外國會社又ハ外國人ニシ
 テ其營業ヲ繼續セントスルモノ
 ハ明治三十二年大藏省令第二十
 四號銀行條例施行細則第一條第
 二條又ハ第三條ノ規定ニ準シ地
 方長官ヲ經由シテ大藏大臣ノ認
 可ヲ受クベシ

英國
 大
 使
 館

一新條約實施後銀行營業繼續ノ認
 可申請ヲナストキハ認可迄ノ間
 營業ヲ中断セラル、ノ不便アル
 ニ依リ便宜ノ為メ右實施前認可
 申請書ヲ提出スルモ妨ナシ然ル
 トキハ實施ト同時ニ電報ヲ以テ
 認可指令スヘシ

一獸醫ヲ營ム外國人ニシテ新條約
 實施後引續キ其業ヲ營マント欲
 スルモノハ明治二十三年法律第

英國
 大
 使
 館

蹄ハ蹄ノ誤リトシ

七十六號獸醫免許規則第三條ニ
 據リ同則第二條ノ資格ヲ証明ス
 ル証書ノ寫ヲ添ヘ地方廳ヲ經テ
 免狀下付願書ヲ農商務大臣ニ提
 出スヘシ

一蹄鐵工ノ業ヲ營ム外國人ニシテ
 新條約實施後引續キ其業ヲ營マ
 ント欲スルモノハ明治二十三年
 法律第三十一號蹄鐵工免許規則
 第三條ニ據リ同則第二條ノ資格

ヲ証明スル証書ノ寫ヲ添ヘ地方
 廳ヲ經由シテ免狀下付願書ヲ農
 商務大臣ニ提出スヘシ

一獸醫又ハ蹄鐵工ノ免狀ヲ受クル
 モノハ明治二十九年法律第二十
 七號登錄税法第八條規定ノ登録
 税ヲ納ムヘシ

一從來其業ヲ營ミタル獸醫又ハ蹄
 鐵工ニシテ新條約實施後ニ至リ
 テ免狀下付ヲ申請スルトキハ免

英國大使館

狀、下付アル迄營業ヲ中断セラ
ル、不便アルニヨリ便宜、為
メ新條約實施前ニ免狀下付願書
ヲ農商務大臣へ提出スルモ妨ナ
シ
右回荅旁本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ
向テ敬意ヲ表シ候敬具

明治三十二年六月二十八日

外務大臣子爵青木周藏

大不列顛特命全權公使

サ、アーネスト、メーソン、サトウ閣下

第廿六

本月三日附貴翰領收致披見候然ハ
今般貴國

皇帝陛下叡旨ヲ以テ閣下ヲ北京駐
劄公使ニ被任候旨並ニゼ、オノレブル、プラ
ンケツト氏ヲ閣下ノ後任ニ遴選シ當國
へ駐在セシメラレ候旨御通知ノ趣
致了悉候

今回閣下ノ御轉任ハ即チ平素貴國
皇帝陛下ノ深ク閣下ヲ御信任被為

英國大使館

英國大使館

在ニ出候儀ニテ實ニ慶賀ノ至ニ存
候抑モ閣下當國ニ御駐在已降于茲
十八年ノ久キ常ニ拮据周旋能ク貴
我西政府ノ親睦ヲ全セシメ且我改
府維新以來百事改良ノ秋ニ方リ閣
下ノ勸誘ニ頼リ成業セシ事蹟一二
シテ足ラズ是我政府ノ深ク感銘ス
ル所ニ候

今閣下他邦へ御轉任ノ儀ハ當政府
於テ固トニ憾惜ニ不耐候得共ゼオ

レブルフランケット氏其人ノ如キ至當ノ後
任ヲ業已ニ御撰定相成候ハ是又貴
政府ニ於テ常ニ兩國間ノ交際ヲ重
セララル、ノ微證ニシテ我

皇帝陛下ニ於テモ甚夕御満悦被為
在候就テハ同氏在任中ハ猶ホ閣下
御在職中ニ於ル如ク貴我兩國間ノ
交誼愈ニ親密ヲ加ルニ至ルハ拙者
ノ確信シ且冀望スル所ニ有之候此
段回答得貴意候教具

明治十六年七月五日

外務卿井上馨

大不列顛國特命全權公使

サー、ハルリー、エス、パークス

閣下

第廿七

覺書

帝國外務省ハ客年七月十一日附支
 那臺灣移民會社支那移民取扱方ノ
 義ニ關スル在本邦英國大使館ヨリ
 ノ覺書ヲ入手シ其旨ヲ領セリ
 本件ハ臺灣總督府主管ニ属スルヲ
 以テ内務省經由同府ニ照會シ置タ
 ル處茲ニ接シタル回答ノ趣旨左ノ
 如シ

嚮ニ臺灣ノ我版圖ニ属シタル當

時同嶋ノ安寧及秩序ヲ維持スル
カ為ノ明治二十八年十一月臺灣
總督府令第二十二號ヲ以テ清國
人臺灣上陸條例制定セラレ勞働
者及一定ノ職業ナキ者ノ上陸ハ
一切禁止セラレタリ次テ明治三
十七年九月臺灣總督府令第六十
八號ヲ以テ清國勞働者取締規則
發布セラレ一定ノ條件ヲ具備ス
ルモノニハ特ニ地方廳ヨリ上陸

許可証ヲ下附シテ勞働ニ従事ス
ルコトヲ認容スルコト、セリ而
シテ其具備スヘキ條件トハ臺灣
總督府ニ於テ確實ト認メ且ツ其
命スル處ニ從ヒ一定ノ保証金ヲ
納メテ其許可ヲ得タル移民取扱
人ナルモノニ於テ臺灣上陸後勞
働カカ疾病其他ノ事故ニ因リ困
難ニ陥リタルトキ之ヲ救助シ又
若シ官廳ヨリ送還ヲ命セラレタ

ルトキハ其勞働者ヲ本國ニ送還
スルノ義務ヲ負擔スルヲ謂フモ
ナリ而シテ地方廳ニ於テ清國
勞働者ノ上陸ヲ許否スル場合ニ
ハ此義務負擔者引受ノ下ニ渡航
シタル勞働者ナルヤ否ヤヲ檢索
スルノ必要上其保証者アル証票
トシテ渡航証明書ヲ携帶セシム
ルコトトナリ居レリ故ニ此渡航
証明書ヲ携帶スル移民ハ即チ移

英
國
大
使
館

民取扱人ニ於テ前顯ノ義務ヲ負
擔スルモノナルヲ以テ地方廳ニ
於テ之ニ上陸許可証ヲ下附スヘ
キモ該証明書ナキモノニハ之ヲ
下附スルコト能ハサルナリ而シ
テ如何ナル勞働者ニ渡航証明書
ヲ下附スヘキヤ換言スレハ移民
取扱人ニ於テ如何ナル勞働者ニ
對シテ前顯ノ義務ヲ負フヘキヤ
及其勞働者ハ如何ナル方法ニ依

英
國
大
使
館

リ渡臺セシムヘキマハ全ク該移
民取扱人ノ裁量ニ一任シ臺灣總
督府ニ於テハ之ニ于涉セサルナ
リ
以上ハ臺灣總督府回答ノ梗概ナリ
猶ホ英國大使館ノ覺書ニ依レハ後
藤伯爵及曾根氏ハ臺灣總督府ノ官
職ヲ奉スルモノト信セラル、モノ
、如クナルモ同伯爵ハ一ノ移民取
扱者タル臺華移民會社ノ役員ニシ

テ曾根氏ハ廈門ニ於ケル其ノ代理
人ニ過キス隨テ兩名トモ臺灣總督
府ノ官吏ニアラカルナリ念ノ為メ
茲ニ之ヲ附記ス

明治三十九年二月二十七日

日本帝國外務省

第廿八

以書翰致致上候陳者貴國汽船「セイキ」
 號ヲ帝國海軍ニ於テ拿捕シタルニ
 對シ「ベヅウイン」汽船會社ヨリ損害補償
 方願出テタル儀ニ關シ客年九月三
 十日付桂前外務大臣宛並ニ客月二
 十六日付本大臣宛貴翰ヲ以テ御照
 會、極致致承候右ハ帝國政府ニ於
 テ一般損失補償問題ニ關スル事件
 調査、爲メ特ニ設置シタル委員ニ

英國大使官

英國大使官

附シ調査ヲ遂ケシノ候處本件事實
ハ「ジュネーヴ」條約ノ原則ヲ海戦ニ應用
スル條約第六條ノ規定即チ「中立國
ノ商船遊船又ハ端舟ニシテ交戦國
ノ傷者病者若ハ難船者ヲ搭載シ若
ハ收容スルモノハ此輸送ノ事實ノ
爲メニ捕獲セラルノコトナシ然レ
トモ中立違反ノ所爲アルトキハ捕
獲ヲ免レサルモノトス」トアルニ諺
當スルモノニ有之候「シエーキ」號カ單ニ

露國兵負ヲ救助シ收容シ居タル事
實ハ固ヨリ未タ之ヲ以テ直ニ拿捕
ノ原因トナスヲ得サルハ明カナル
モ帝國軍艦筑紫カ本船ニ會合シ正
規ノ臨檢ヲ遂ケタル際帝國臨檢將
校ハ其ノ露國兵負ヲ救助シ現ニ之
ヲ收容シ居ル事實ヲ發見シタルヲ
以テ諺露國兵負ハ此時ニ於テ帝國
官憲ノ權内ニ陥リタルモノニ有之
候而シテ交戦國一方ノ戦鬪負ニシ

テ他ノ一方ノ権内ニ陥リタル者カ
俘虜トナルヘキコトハ國際法上ノ
原則ニシテ前記條約第九條ニ於テ
モ亦之ヲ規定セル所ニ有之候加フ
ルニ交戦國ニ於テ敵ノ軍務ニ從事
スル者ヲ俘虜トナスハ軍事上ノ必
要ニ出ツルモノニシテ交戦權ノ作
用トシテ交戦者ノ當然保有スヘキ
權利ニ屬シ中立國及中立國民ハ之
カ行使ニ對シ何等干渉ヲ加フヘカ

ラサル義務ヲ負フモノニ有之候然
ルニ本件ニ於テ「シエーキ」號船長カ帝國
臨檢將校ノ要求ニ拘ラヌ露國兵負
引渡ヲ拒ミタルハ明ニ中立違反
ノ所爲ニシテ從テ帝國軍艦ニ於テ
本船ヲ拿捕シタルハ前記條約ノ規
定ニヨルモ將^ク國際法ノ原則ニヨル
モ其適法ナルコト疑フヘカラサル
儀ニ有之候
右ノ如キ次第ナルヲ以テ若シ條約

ノ規定及國際法ノ原則ヲ嚴正ニ適用スルトキハ「シエーキ」號ハ帝國海軍ニ於テ之ヲ捕獲審檢所ニ送致シ其檢定ニヨリテ之ヲ沒收スルモ何等差支ナキモノニ有之候ヘ共帝國官憲ハ船長ニ於テ或ハ國際法規ノ誤解ニ出テ敢テ惡意アルニアラザリシヲ察シ且ツ船長ハ該露國兵負ヲ在天津英國領事ニ引渡スヘキヲ證言シタルヲ以テ其實害ナキヲ認メテ

特ニ本船ヲ解放シタルモノニ有之候ニ付キ本件拿捕事件ニ付テハ帝國政府ニ於テ何等之カ損失ヲ補償スヘキモノニアラスト相認メ候間右様沸承知相成度此般回答旁本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

明治三十九年七月十二日

外務大臣子爵林 董

閣ノ下下ノ一字ヲ
脱セシナラン

大不列顛特命全權大使

サー、クロード、マックスウエル、マクドナルド閣

第廿九

以書簡致成上候然ハ先般小笠原島
エ派遣ノ我國官吏ヨリ在同島貴國
人ウヱブ氏ニ對シ我國ノ民籍ニ入ル
ヤ否若シ我國籍ニ加入不致上ハ我
政府ヲ保護ヲ不與候間其儀ハ自國
政府エ依頼可致旨右官吏ヨリ申聞
候趣同氏ヨリ在神奈川貴國領事エ
申立候次第九月八日付ノ貴翰ヲ以
テ縷々御申越ノ趣致美知候

英國大使官

同氏ハ我國他ノ領土内ニアル外國
人同様我政府ノ保護ヲ可受權理有
之候趣御申越ニ候處右ハ同氏身體
及賤産ニ付警察上ノ保護ナレハ素
ヨリ我政府ノ保護ニ依ラサルヲ得
ス乍併右身體及賤産上ニ關シ他ノ
外國人トノ間ニ訴訟ヲ生スルトモ
裁判上ノ保護ヲ要求スル能ハサル
ヲ以テ他ノ開港場ニアル外國人或
ハ同島ニ在ル我國人ト一樣ナル完

全ノ保護ヲ得ル能ハス右ノ次第ナ
ルヲ以テ我官吏ヨリ同氏ニ對シ保
護ヲ與ヘサルベシト申聞シハ即チ
警察上ノ保護ニアラスシテ裁判上
ノ保護ヲ指ス事ニ有之候右ハ曾テ
我官員派出前島中徃々惡行ノ者有
之頻ニ我政府ノ管轄ヲ企望スルノ
聞エ有之其情願閣キ難キニ由リ過
ル文久元年數人ノ官員ヲ出張セシ
メタルニ土人皆我政府ノ管轄ニ歸

スヘシト盟約シタリ爾後我國多事
ニシテ一時該官吏ノ交代絶ヘタリ
シニ更ニ土人其不幸ヲ愁訴スル趣
相聞タレハ昨年復先年ノ如ク官員
ヲ派出セリ右様土人ニ於テ完全ノ
管轄ヲ要スルハ其當初ノ望ニ有之
候儀ハ閣下ニモ必御聞及被成候半
ト存候

明治九年十二月廿二日在横濱貴國
領事ロベルトソン氏ヨリ閣下ノ命ニ因

リ在島貴國人民エ諭達セラレ候書
面中英國人民ハ固ヨリ英法ニ従フ
可ク糾問處罰ノ儀ハ英國ノ法官ヨ
リ處置可致乍然日本官吏ヲ尊敬シ
一般ノ安寧ヲ保ツヘキ教示ハ謹テ
遵奉可スヘキ旨相見候得共貴國ノ
法官派出無之間ハ前文後段ノ趣旨
ヲ實踐セシムル事ハ出来申間敷若
シ貴國人中目下一般ノ安寧ヲ妨害
スル等ノ事アル時ハ何人ノ權ニヨ

英國領事館

リテ取締處罰ノ處分ヲ行フヘキ哉
右様ノ場合ニ於テハ是非共我政府
官吏ノ手ニ據ラサルヲ得ス其他我
政府ニ於テモ亦我國人民ヨリ貴國人
ニ對シ訴訟ノ件有之候節其愁訴ノ
状情ヲ述テ其曲直ノ判決ヲ乞フノ
道無之ヨリ不得止我人民ノ保護ヲ
闕キ候様成行彼我人民ノ間ニ於テ
幸不幸アルノミナラス施治實行ノ
際不都合不少候故ニ同島居住ノ貴

國人民ハ我國民同様民事刑事ノ差
別ナク我政府管轄ノ下ニ歸セサレ
ハ實地雙方人民ノ保護難相立候條
閣下ニモ前述ノ次第篤ト御熟慮相
成候得ハ御異存無之答ト存候
貴翰末段ニ其意ニ悖リ本國ノ籍ヲ
離レ日本ノ籍ニ加入セシム云々御
申越ニ候處移籍ヲ好マサル外國人
ヲシテ強テ我國籍ニ入ラシメント
スルハ人情ニ反シ決テ難被行事ニ

テ我政府、趣旨ハ勿論同島派出ノ官吏於テモ右様ノ儀ヲ施行セントノ所存ハ無之答ニ候間左様御承知有之度此段回答得貴意度如此候敬具

明治十年十二月廿一日

外務卿寺島宗則

大不列顛特命全權公使

サー、ハルリ、エス、パークス

閣下

第三十

口上書

帝國外務省ハ昨年三月赤間關ニ於テ起リタル英國人「アール、ジ、デー、シ、ン、ゲ、ルト、ン」ノ要塞地帯法違反事件ニ關スル本年一月二十四日附英國公使館ノ口上書ヲ受領シ早速本件ノ事實ヲ取調ヘタルニ其結果ニ依レバ写真器械保護ノ函ハ赤間關警察署ニ送付セラレタルニ非スシテ山口地方裁判所赤間關支部法廷ニ「シ、ン、ゲ、ルト、ン」自

ヲ提出セシモノニ係リ廣島控訴院
ニ於テハ右函モ亦寫真器械ノ附屬
品トシテ共ニ沒收ヲ宣告シタルナ
リ
該口上書ニ記載スル所ハ此ノ如ク
其重要ナル點ニ於テ事實ニ相違ス
ルノミナラズ本件司法處分ニ苛酷
ノ廉アリトハ毫モ認メ難シ即チ廣
島控訴院ハ曩ニ其確定判決ノ執行
ニ着手シタル節「シングルトン」ヨリ申立

テタル故障ハ法律ノ認メサル所ナ
ルニモ拘ラズ一時其執行ヲ停止シ
其後同人ガ英國公使ノ勸告ニヨリ
テ故障ノ申立ヲ取消シ罰金ヲ上納
シ寫真器械ハ特別ノ詮議ヲ以テ拂
下アリタシト請願シタルニ付控訴
院ハ同人ノ希望ニ對シ相當ノ便宜
ヲ與ヘンカ為ノ拂下ノ日時場所其
他拂下請求ノ手續等ヲ指示シ且寫
真器械ノ函モ亦附屬品トシテ共ニ

没收ヲ宣告セラレタルコト等ヲ篤
ト諭示セリ是等ハ皆該口上書ノ日
附以前ニ於ケル事實ニシテ此ノ如
ク廣島控訴院ニ於テ同人ニ便益ヲ
與ヘタルノ結果同人ハ其申出價額
ヲ以テ拂下ノ希望ヲ達シ一月二十
六日代理人ヲ以テ没收物件一切ヲ
受領セリ
右拂下ニ關シテハ最初ヨリ控訴院
ハ「シングルトン」ガ手續ヲ了解セサル廉

モアルヘシト諒察シテ終始詳密ノ
注意ヲ與ヘタルニモ拘ラス同人ハ
本件ノ繼續中屢ニ謂レナキ苦情ヲ
申出デ、手数ヲ煩ハシタルカ如キ始
末ニシテ本件ニ關シ控訴院ニ於テ
苛酷ノ取扱ヲ為シタルノ事跡ハ毫
末モ之ナキノミナラス却テ大ニ寬
容ノ處置ニ出テタルモノト認ム
又英國公使館ノ口上書ニ依レハ「シン
グルトン」ハ當時下ノ關ニ於テ撮影禁

英國大使館

止ヲ外國人ニ戒告スルノ揭示ヲ見
ズ又巡查ニ之ヲ尋子タルモ禁止ア
ルヲ知ラサルモノ、如ク而シテ同
地日本郵船會社代理店日本人某ハ
「シンゲルトン」ニ對シ撮影ニ關スル何等
ノ禁制ナシト語りタリトアレドモ
山口縣廳ノ報告ニヨレハ同地要塞
地帯内一定ノ箇所ニハ禁止事項ヲ
和英兩文ニテ明記セル榜示アリ假
ニ「シンゲルトン」ガ此榜示ヲ見得ルノ地

ニ至ラザリシトスルモ同人が乘リ
タル本船ニ見丸船室ハ勿論其上陸
ノ為乘リタル小蒸汽船ニモ日本郵
船會社ニ於テ注意ノ為為シタル撮
影禁止ニ關スル揭示アリ殊ニ寫真
器械ヲ携帶スル外國人上陸ノ節ニ
ハ同社ニ於テ常ニ注意スルノ例ナリ
トイフ又當時巡查ニ於テ「シンゲルトン」
ヨリ撮影禁止ノ有無ニ付尋ヲ受ケ
タルコトナク巡查ガ現場ニ出張セ

シ時ハ既ニ同人ノ撮影後ナリシ由
此ノ外第一審裁判所ノ判決ノ理由
トシテ該口上書ニ記載スル所モ亦
事實ニ相違シ又同人ガ神奈川縣ニ
屬スル横濱警察署ニ就キ静岡縣ニ
屬スル熱海ニ於ケル撮影禁止ノ有
無ニ關シ問合ヲ為シタルハ管轄ヲ
誤リタルモノナリト雖是等ノ諸點
ハ本件ノ枝葉ニ屬シ又ハ本件ニ直
接ノ關係ナキヲ以テ深ク之ヲ究ム

ルノ必要ヲ認メズ只參考ノ為茲ニ
言及シタルノミ
終ニ臨ミ旅行外國人等ガ正確且容
易ニ撮影禁止區域ニ關スル心得ヲ
得ル様當該官廳ニ於テ處置アリタ
シト、英國公使館ノ勸告ニ對シテ
ハ帝國外務省ハ要塞地帯ノ區域ハ
既ニ官報ニテ告示セラル、ト雖尚
知ラズシテ法ヲ犯スモノ、生スル
ヲ防クノ途ヲ盡スハ望マシキコト

ナリトシ此趣旨ヲ以テ其筋筋ニ照
會ヲ為シタルニ要塞地帯ノ境域ヲ
表示スル為ニハ從來既ニ實地ニ標
木等ヲ設ケテ禁止事項ニ關スル和
英兩文ノ戒告ヲ記シ又日本郵船會
社等ノ船舶ニハ其會社ニ於テ右戒
告ヲ掲ゲ居レリト雖尚將來ハ内外
汽船共該戒告ヲ揭示スル採取計中
ナル旨並ニ要塞地帯附近地ニ在ル
警察官吏ニモ相當ノ注意ヲ為ス様

訓示方取計ヒタル旨回答アリタリ
明治三十四年三月七日

第世一

以書翰致啟上候陳者本年四月九日
 及十日長崎市ニ於テ貴國水兵ト佛
 國水陸兵トノ間ニ鬪爭アリタル件
 ニ關スル同月二十日附貴國公使「サ、
 クロイド、マクドナルド」氏ノ書翰ニ對シテ
 ハ前任加藤外務大臣ヨリ翌月六日
 附書翰ヲ以テ一應致回答置候處右
 鬪爭ノ際警備ノ任ニアリタル警察
 吏ノ員數充分ナリシヤ否又同市地

方裁判所檢事正ノ行動並ニ將來ニ
對スル警察上ノ取締方等ニ付同公
使ヨリ申越サレタル件ニ關シテハ
當時其筋ニ於テ調査中ニ有之候ニ
付追テ何分ノ義可申進都合ニ相成
居候然ルニ今般司法大臣及内務大
臣ヨリ其調査ノ結果ヲ本大臣ニ通
知致越候ニ付是等ノ點ニ關シ左ニ
回答申進候

四月十日ノ鬭爭ハ既ニ其前日ノ小

鬭ニ依リテ殆ント豫期シ得ヘキモ
ノナリシカ故ニ若シ長崎警察署ニ
於テ之ヲ豫防スル為メ當日ノ勤務
員ヲ増加スルカ若ハ兩國水陸兵ヲ
同時ニ上陸セシメサル様其艦長ニ
請求シタランニハ該事變ヲ未萌ニ
防止スルコトヲ得タルナルヘシト
ノ意見ヲ「マクドナルド」氏ハ抱有セラレ
候處該地ノ警察署ニ於テモ亦此衝
突アラシクコトヲ慮リ一方ニ於テ梅

香崎警察署ハ十日午前十時貴國領事ヲ訪問シテ前日鬪争ノ狀況ヲ告ケ當日モ雙方トモ多數ノ上陸者アルヲ以テ警察署ニ於テハ可及大警戒ヲ為スト雖此領事ニ於テモ注意アリテ相當ノ取計アリ度旨ヲ申込ミタルモ貴國領事ニ於テハ別段ノ措置ヲ必要トセラレザリシカ如ク而シテ警察署長ハ一方ニ於テハ市内ノ要所ニ巡查ヲ配置シ一朝事變

ノ起ルニ際シテハ當該警察署互ニ相應援スルノ手配ヲ為シタルニ依リ當日事變發生ノ報長崎警察署ニ達スルヤ同署ニテハ即時ニ二十名ノ巡查ヲ現場ニ派遣シタリ然レトモ該鬪争ハ咄嗟ノ間ニ起リ忽ニシテ終熄シタルヲ以テ乍遺憾警察ノ力ヲ鬪争中ニ其現場ニ集中スルヲ得ス隨テ貴國水兵ニ加害セル佛國水陸兵ヲ陸上ニ於テ逮捕スル機會

ヲ逸スルニ至リタルモノニ有之候
次ニ「マクドナルド」氏ノ書翰ニ依レハ右
鬪争ニ加ハリタル佛國水陸兵カ「
ガ」號ニ乘搭セル者ナルコトヲ長崎
地方裁判所檢事正ニ於テ認知シタ
ルハ檢事正カ四月十一日貴國領事
ノ請求ニ依リ為シタル調査ノ結果
ナルカ如ク同領事ヨリ報告アリタ
ル様被存候得共檢事正ハ四月十日
午後七時三十分梅香崎警察署ヨリ

該鬪争ノ報告ヲ受クルヤ直チニ負
傷者ノ檢証及加害者檢擧ノ手續ニ
着手シタルモノニシテ其翌日同官
カ貴國並ニ佛國ノ艦船ニ到リタル
モ亦全ク此手續ヲ繼續シタルニ外
ナラス候又貴國領事ハ「
帆」ヲ延引セシムヘキ手續ヲ取ラレ
度^旨檢事正ニ請求セルニ檢事正ハ之ニ
應セサリシ然ルニ若シ同船ノ出帆
ヲ延引セシノタラシニハ或ハ加害

者ヲ逮捕スルコトヲ得ルニ至リタ
ルヤモ難計トノ意見ニテ「マクドナルド」
氏ハ此點ニ就キ一考ヲ煩シ度旨前
任外務大臣へ被申越候得共「イーヴ」
ノ乗搭負ハ鬪争後間モナク歸船シ
而シテ同船ハ純然タル軍隊ノ運送
船ニシテ船長以下ノ職員皆佛國ノ
海軍現役ニ属スルカ故ニ帝國司法
官ニ於テ其乗搭兵員ヲ歸船後逮捕
スルコトヲ得サルハ申迄モ無之即

キ此場合ニ於ケル問題ハ唯同船ノ
出帆ヲ延引セシメタランニハ加害
者ヲ檢擧シ得ルノ見込アリシヤ否
ノ一點ニ歸着スル様被存候然ルニ
同檢事正カ該船出帆ノ延引ニ關ス
ル貴國領事ノ請求ヲ受ケタルハ十
二日午前八時ニシテ此時ハ正ニ該
船出帆ノ際ニ有之候ニ付此際出帆
ノ延引ハ事實上之ヲ為スコト能ハ
サリシ儀ニ有之候元來檢事正カ貴

國領事ヨリ請求アルト否トニ拘ラ
ス相當ノ時期ニ於テ該船ノ出帆ヲ
延引セシムヘキ措置ヲ執ラサリシ
ハ職務上其行動ニ於テ敏活ヲ欽キ
タルヤ否ヤヲ考察スルニ十一日午
後二時過檢事正ハ貴國軍艦「バーフラア」
號ニ自ラ出張シテ乘組士官ニ面會
シ貴國兵中加害者ヲ見知ル者若ク
ハ犯人ヲ檢擧スルニ足ルヘキ證據
ハナキヤト問ヒタルニ見証人ハ勿

論一モ證據トナルヘキモノナシト
ノ答ヲ得タリ而シテ絶ヘス陸上ニ
於テ為シタル證據取集ノ結果トシ
テ梅杵崎警察署ハ十一日夜ニ至リ
テ鬪争ノ現場ヲ目撃シ事實ヲ詳知
スルト云フ貴國人一名ト米國陸兵
一名アルコトヲ探知シタルモ同夜
ハ警察吏負遂ニ証人ニ出會セズ漸
ク其居所氏名ヲ確カメテ此二名ノ
証人ヲ取調フルコトヲ得タルハ十

二日午前十時過ニシテ佛國軍用船
ノ既ニ出帆シタル後ニ有之候故ニ
十一日ニ於テ檢事正カ知り得タル
事實ハ單ニ加害者ハ「ニイグ」號ノ乗搭
員ナルコトト現場ヲ目撃シタリト
云ハル、証人ニ名アリトノ二事ニ
止マリ果シテ彼等カ如何ニ有力ノ
証言ヲ為シ得ヘキヤハ本人等訊問
ノ上ニアラサレハ素ヨリ之ヲ知ル
コトヲ得サルニ因リ其訊問前ニ當

リテ檢事正カ「ニイグ」號ノ出帆ヲ延引
セシムルニ足ルヘキ理由充分ナラ
スト認メタルハ敢テ失當ノ認定ニ
ハ無之ト存候

將又長崎市ニ於テ水兵等ノ出入ス
ル飲食店ハ粗惡有害ナル酒類ヲ販
賣シ且ツ同市ニ於ケル戎器特ニ仕込
杖ノ販賣ニ何等ノ制限ナキハ彼等
鬪争ヲ惹起シ又ハ其結果ヲ強大ナ
ラシムル原因タルヘキニ因リ相當

ノ取締アラシコトヲ希望セララル、
昔「マクドナルド」氏ヨリ被申越候處衛生
警察及保安警察等内政ニ關スル事
項ニ就テハ帝國政府當該官廳ニ於
テ各所管ニ隨ヒ專ラ其攻究ニ任シ
實際ノ須要ニ應シ適宜ノ法規ヲ制
定スルモノニ有之候ハ是等ノ事
項ニ關シ本大臣ハ外國政府代表者
ト意見ヲ交換スヘキ地位ニ立ツモ
ノニ無之ト存候

右回答旁本大臣ハ茲ニ重テ貴下ニ
向テ敬意ヲ表シ候敬具

明治三十四年六月二十九日

外務大臣曾禰荒助

大不列顛代理公使

ジエームス、ゴートン、ホワイトヘッド貴下

第世二

以書翰致啟上候陳者客年閣下ノ北
京御駐劄中同地公使館所在地區防
衛ノ為メニカヲ盡クシタル人々ノ
氏名ヲ貴國政府へ御報告相成候ニ
當リ特ニ在同地帝國公使館附柴陸
軍中佐ガ貴國公使館ノ防衛ヲ全フ
スルニ與テカアリ從テ幾多人命ヲ
救護スルヲ得タルノ功ヲ御申報
相成而シテ右御申立ノ次第ニ基キ

此度貴國外務大臣ヨリ右柴中佐、
顯著ナル勲功ニ對スル貴國政府賞
讃ノ意ヲ帝國政府ニ致スヘキ様閣
下へ訓令相成タル旨及ヒ右柴中佐
ノ勲功御申立ト同時ニ右公使館所
在地區ノ防衛ニ關シ我海軍陸戰隊
々長原海軍大尉ノ勇武ナル軍功ト
并ニ同大尉ノ引率セル陸戰隊及義
勇隊ガ閣下ニ供シタル援助ノ極メ
ラ有功ナリシ趣ヲモ併セテ御申報

相成是ニ對シテモ貴國外務大臣ヨ
リ本大臣ヲ經テ貴國政府賞讃ノ意
ヲ原大尉迄傳致候様訓令相成タル
旨本月十五日附貴信ヲ以テ御申越
ノ趣均シク致敬承候
柴原ノ兩武官並ニ其部下ノ陸戰隊
及ヒ義勇隊員ガ貴國公使館及ヒ公
使館所在地區ノ防衛ヲ全フスルニ
當リ功績ヲ著ハシ得タルハ畢竟當
時閣下が臨時軍隊總指揮官トシテ

御指揮ノ宜シキヲ得タルニヨルハ
疑ナキ義ニ有之候へ共閣下ノ御申
立ニヨリ該武官等ノ勲功殊ニ貴國
政府ノ認賞ヲ受クル所トナリタル
ハ帝國政府ノ頗ル満足スル處ニ有
之候貴國政府ノ御好意ハ御申越ノ
通り相通シ可申ハ勿論帝國政府ハ
貴國政府ノ深厚ナル御挨拶ニ對シ
深ク感謝ノ意ヲ表シ候
本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意

ヲ表シ候敬具

明治三十四年一月二十一日

外務大臣加藤高明

大不列顛特命全權公使

サレクロード、マクドナルド閣下

v.61534